



# 啓蒙犯罪



～仕組まれた危機意識～

夜美神威

## 概要

---

「あなた方に犯罪を行って貰います」

書店万引き・援助交際・コンビニ強盗・銀行強盗  
宗教テロ・政治テロ・全て国家が国民の危機意識を  
高める為に用意した啓発の為の犯行  
「啓蒙犯罪」だった

ブログで掲載されたショートショート25編

プチショートショート10編

意味を理解すると怖い話10編

yami story's ゲシュタルト～狂い出した歯車～

バースデイ編・ミステリー編・宝探し編・恐怖編・ちょっぴりHなゲシュタルト編

本書の為に書き下ろしたショートショート10編

タイトルバックyami story's 「啓蒙犯罪」

全章収録のイファマール追憶記Lite Vol4.0

おまけ～日本人の嫌いなブラックジョーク5編

全ての作品に大幅な加筆修正を加えた完全保存版

## これから啓蒙犯罪をご覧頂く前に

---

はじめに

初めましての方もそうでない方もどうも夜美神威です

中学生の頃でしょうか学校の図書室で星新一氏の著書に出会い  
ショートショートの世界に魅力を感じました  
フジテレビの世にも奇妙な物語も大好きです

2008年に「ALIVE NOTE」と言うショートショート集を出版  
2012年には「Perfumeless」こちらもショートショート集で出版

今回夜美神威ショートショート集オフィシャル第3弾は  
電子書籍先行版と言う形で出版したいと思います  
限りある地球資源を守るためと電子書籍の可能性を図る為にも  
もっとも紙書籍の自費出版には多額の費用がかかる点も考慮して  
有料である事の意義  
手を抜かず読者の皆様にご納得頂ける作品にしないといたしません

今作は先に無料公開した当作品を大幅にパワーアップさせた内容でお届けします  
過去のショート・ショートや短編の作品も大幅に見直し加筆修正したつもりです  
そしてイファマール追憶記はこれで一つの作品になる位の大作をL i t e版として先行収録  
さらに本書の為の書き下ろしショート・ショートも収録

私のショート・ショートはとにかく短い  
その短い文章の中に「起・承・転・結そして変」があります  
活字が苦手な方でも気楽に読んで頂けると自負しております

1話数分で気軽に読めるショートショート集他  
どうぞお楽しみ下さい

b y G A N E R F 夜美神威

## ショート・ショート

---

ショート・ショートです

日常の世界から想像のファンタジーの世界まで

ありとあらゆる事柄を題材にした小説です

1話数分で読める気軽なスタイルの作品群

どうぞお楽しみ下さい

不思議な扉が今開かれる

## サタンとの契約

---

僕は毎週教会に行き神様にお祈りを捧げていた  
質素ながら真面目にコツコツ働いて幸せな生活をしていた

神父様はこうおっしゃった  
サタンの誘惑には負けてはなりません  
悪魔のささやきには耳を貸してはいけません

ある日  
僕の前にサタンが現れた  
「人間よ何でも欲しい物言ってみろ」  
僕は最初耳をかさず神様に祈りを捧げていた

ある日友人が最新式のパソコンを買ったらしい  
友人の家でパソコンのお披露目会  
羨ましかった・・・  
僕はサタンとの契約をすることにした  
「サタンよパソコンが欲しい」  
「どんなパソコンだ」  
「友人よりスペックの高いパソコン」  
朝起きるとデスクに最新式のパソコンがあった

ある日友人が車を買ったらしい  
ドライブに誘われた  
友人は女の子を助手席に僕を後部座席に乗せ海までの外出  
羨ましかった・・・  
僕はサタンとの契約をすることにした  
「サタンよ車が欲しい」  
「どんな車だ」  
「友人より派手な赤いスポーツカー」  
翌日アパートの駐車場に車が  
最新の赤いスポーツカーを手に入れた

ある日友人が家を買ったらしい  
友人の家に招待された、庭付き一戸建て  
羨ましかった・・・  
僕はサタンとの契約をする事にした  
「サタンよ家が欲しい」  
「どんな家だ」  
「友人より広い庭付き一戸建て」  
朝起きるとテーブルの上に  
新築の豪邸の家のカギが置いてあった

サタンが現れた

「パソコンの代金30万円  
車の代金300万円  
家の代金4500万円支払ってくれ」

僕は神に祈りを捧げた  
友達の持ってる物を欲しいと思う事  
それは悪い事ではないと思うけど  
自分で額に汗を流して働いたお金で買うべきだった  
安易にサタンと契約する事で簡単に手に入ったけど  
それは間違いと気付いた  
僕の心は何か寂しかった  
虚栄心・・・僕の心はさもしかった  
神に自らの罪を告白し懺悔した

翌朝  
目が覚めるとデスクにあったパソコンが無くなり  
駐車場に停めてあった車も無くなり  
新しい家のカギも無くなっていた

神は常に私の傍に居てくれた

## 老後

---

今日も早起き天気が良い  
デジタル時計の軽快なテクノポップスのアラームで目を覚まし  
電気ケトルでお湯を沸かしてブラックのコーヒーに菓子パン  
スマホやタブレットの充電も完了していて  
ネットでニュースを見る  
あの時代熱狂していたアイドルに孫が生まれたとか  
今日は妻とのデート アウトレットモールに足を運び  
もっぱら私は荷物持ち 昼食はパスタにピッツァとイタリアンに済ませ  
午後からは秋葉原へ そう言えば妻との馴れ初めもここ秋葉原に関係している  
当時のネットの無料オンラインRPGで出会った事を思い出す  
そう言えば3Dホログラフが実現したのはつい先日の事  
それを見に家電量販店へと足を運んだのだ  
科学技術の進歩は僕らの青春そのもの 次から次へと新しい物が生まれ消えていく  
新しいゲームソフトも出るらしくすでにネット通販で予約済み  
攻略サイト見ながらのプレイになるだろうね ファイナルファンタジー32  
午後は洒落たレストランで食事  
すべてネットで予約していたのでスムーズに事が進む レストランの場所もスマホのナビで  
これが70歳になる私の老後 現在2040年のごく一般的な老後

## 恋愛スキャンダル

---

私は女性5人組アイドルグループZのリーダー  
実は周りに内緒にしてる事があって・・・  
某有名人M男性とお付き合いしてるの  
夜な夜な内緒で彼と密会 今日も彼と食事デート  
食事の時は帽子深めだけどマスクは取る  
サングラスはかけない返って怪しまれるから

パシャ

ふいにフラッシュが炊かれる音が やられた！！  
どうしようスキャンダルだ お終いだ  
数日後写真週刊誌に写った紛れもない私と彼 有名人M！  
見出しにはこう書かれていた  
有名人Mの熱愛発覚！  
アイドルグループZのリーダ「似」の一般女性と熱愛発覚

## いじめ

---

僕は転勤が多い父親の影響で転校ばかり 新しく転校してきた学校で仲間が 出来ました。

「おい、この泥団子食べろ」「うん...んぐ...美味しいよ」「美味いんだってアハハば〜か」

「ねえここで裸になってスカートはいてよ」「うん」「本当に脱いでる男なのにスカートはいてるよアハハば〜か」

「ほらよっと」(バシャ)「トイレの水でびしょびしょだなお前〜あっははは」

今日はM君が転校することになりました「ヤバくない？あの事先生にバレてない？」

「M君から挨拶」

「皆さん短い間でしたけどお世話になりました

ヨモギ団子食べさせて頂いたり

皆でファッションショーをやったのも良い経験です

プールで水遊びしたのも忘れません

次の学校に行っても皆の事は決して忘れません!!」

## ときめきメモリー

---

僕は長い行列に並んでいた  
今日発売される恋愛シュミレーションゲーム  
その名も「ときめきメモリー」  
このゲームは主人公が幼馴染の女の子やその他の登場人物などと  
恋愛していくゲーム  
なぜ行列が出来ているかって？  
この間発売された最新ゲーム機初の恋愛シュミレーションゲームだから  
このゲーム機は辺り1面に3D空間を作り出しあたかもゲームの中に  
自分が入り込んでいるかのような感覚に浸れる感じなのだ  
早速ときメモを買って帰り新しく買ったメモリカードをセット 電源ON  
「はじめて出会ったのはいつかしら～」  
可愛い 幼馴染のMちゃん 僕は他の女の子には目もくれずMちゃんに入れ込んだ  
保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校・大学・社会人  
ゲームを買ってから2年が経とうとしていた 休みの日はもっぱらゲーム

あっ言い忘れてた このゲーム コントローラーは腕にはめて  
実際にゲームキャラに触れる事が出来るんですよ！凄いでしょ！  
何とか素粒子って技術が開発されて光を物質化して  
だから彼女と手をつないだりキスをしたりそれ以上・・・  
「ねえS君今日はどこに連れてってくれるの？」  
僕は決めていた・・・この日プロポーズする事を

いつものように仕事から帰りゲームの電源を入れた・・・あれ？でーたが・・・データが無い！  
嘘だろ・・・マジかよ・・・何度も抜き差ししてみる！でもデータは復活しない・・・どうし  
よう・・・どうしたら・・・  
走馬灯のように蘇るのはMちゃんとの日々 初めて出会った保育園の時お弁当を分け合いっこした  
幼稚園ではプールで一緒に泳いだね 小学校のリレーの時は手を振って応援してくれた  
中学校で初めて告白・・・ドキドキした 高校生のとき初めてのキス！胸が躍るような気がした  
社会人になり大人のデートを重ねついにプロポーズ・・・するはずだった  
僕はすぐメーカーに問い合わせた 保障は出来ないがなんとかやってみるとの事 修理して帰ってきた

さっそくプレイしてみる 僕の名前を忘れていた いくつか思い出も忘れていた さしずめ記憶喪失  
僕はゲーム内の病院に彼女を入院させた そこでゆっくり治療していこうと医師と相談  
毎日のようにお見舞いに行った すると奇跡的に徐々に彼女の記憶が戻り始めた  
メモリーが復活し始めたのか？  
そして全ての記憶が復活した 改めて僕は彼女にプロポーズした

「ずっとあなたが好きでした」

## オタクの儀式

---

初めてだった・・・

今まで芸能人とか興味なかったのに

その日たまたまテレビを見てると5人組のアイドル「Z」

その中の一人Mちゃんに心奪われた・・・

早速ネットで調べCDやDVDを買いに 初回限定盤が売り切れでやきもきもした

日々募る思いは実際会いたい気持ちに変わり

握手会に応募しては落選で ライブのチケットはプラチナ物で手に入らず

そんな愚痴をSNSでこぼしているととある人から反応が

「俺たちのグループ入らない？」 何だろう？僕と同じあのアイドルが好きな人の集団なのだろうか？

喫茶店で落ち合うって事で会うことにした 人目につき安全だろうと思っただけの行動

しかしネットで知り合った人と実際会うなんて自分にしては思い切った行動 これも彼女のため・・・

「MSさんですか？」 「あっはい」 「どうも～Z命のZ同盟のA推しのAちゃんLOVEです」

お互いハンドルネームで呼びあった 「MSってどういう意味ですか」

もう一人のR推しのRは世界を制覇しちゃうぜさんが聞いてきた

「M推しって言うのかな？Sは僕の下の名前で合わせてるんです」

「最初モビルスーツの略かと思ったぜ（苦笑）」

「んで俺たちの同盟に入るアムロ君？」

「ぜひ！彼女達と一緒に応援する仲間って良いなって思っただけ」

「でも～俺たちの仲間になる為には儀式があっただけ～」

「・・・儀式？」

「とりあえず公園行こ」

公園に着いた僕たち Z同盟の人たちだろうか10人位の人ばかりが出来ていた 「こいつ新人」

「よろしく・・・」

「お前は連邦側かジオン側か？」

「あの・・・僕はガンダムとか興味なくて・・・」

「お前それでよく日本人で居られるな」と、次の瞬間

「お前のZに対する愛を確かめさせてもらう」とある番号の書かれた紙切れを

「これがMの電話番号だ」

えっ・・・

「知らないのか？芸能人の電話番号を調べるのは簡単なんだよ」

「彼らは着信拒否で身内や友人などの電話しか出ない

そしてこの携帯はMの友人から借りた物だ、かけてみる・・・」

そんな・・・僕が落ち込んだときも励まされたMちゃん・・・

楽しいときも悲しいときも常に傍に居てくれた

勝手な想いだけど思うだけで幸せだった・・・

彼女の無邪気な笑顔・・・振る舞いが全てが好きだった

「出来ません・・・Mちゃんに迷惑かけることなんて・・・好きだけど・・・

大好きだけど！彼女の笑顔を曇らせる事はしたくない！」

「・・・合格だ！おめでとうアムロ君！」

えっ

「当然ファンって言うても一線を越えてはいけないの」「ほら」「これ・・・これえ～」

「次の握手会のチケットだ」「俺たちにかかればライブも握手会も簡単だ」

「行って来い！同士よ！きっとララァも待っていてくれるはず！」

「ん・・・何です・・・うわぁ～」 「これ次のライブのチケット・・・こっちは有料」

「俺たち順番でライブに参加してる、さすがに全員のチケット無理」「ありがとうございます」

オタクって抵抗あったけど・・・なんかオタク最高！

## お年寄りを教育しよう

---

私には小学生の孫が居るが  
この間孫が一人でお泊まりに来た  
私達夫婦は近くのバス停まで迎えに行った  
「おじいちゃんおばあちゃん」  
「おおよく来たなケンジ」  
「迷子にならなかったかい？」 「大丈夫これがあるから」  
見せられたのはテレビのCMで知っていたが  
今流行のスマートなとかだ 「これで駅までナビして貰って 乗り換え案内もこれ一つで  
バスの時間もこれで分かった」 昔とは時代がまったく違う  
「僕ねおじいちゃんとおばあちゃんとメールしたい 電話もLIOEなら無料だよ？」 まったくちん  
ぷんかんぷん

ある日村の寄り合いで近所に住む同級生が 自慢げにスマートなとかを使いこなしていた  
「どこで習ったの？」 「駅前に来た老人教習所でだよ」

### 老人教習所

私達夫婦は詳しい話を聞きそこへ行ってみた

「ようこそ老人教習所へ」

そこではスマホからパソコンや語学に至るまで さらに若者講習なるもので最近の若者の流行を知る物まで

「何かご希望ですか？」  
「ええスマホをね孫とメールしたり電話したり」 「沢山の方がお孫さんとのコミュニケーション  
で受講されてますよ」  
「お値段のほうは・・・」 「65歳以上は無料ですよ」  
「優しいコース・普通コース・スパルタコースどのコース選ばれますか？」

「こちらが優しいコースになってます」  
(おじいさまこのボタンを押すと画面にこのマークが表示されますよね それをさらにタッチして  
頂けますう)

「スパルタコースはこちらです」  
(このくそじい何べん言ったら分かるんだ！このボタン押したら この文章が出てくるだろ  
ボケ！)

「ああ普通で結構です」  
.....  
.

首相官邸にて 「例の老人教習所は上手く言ってるかね？」

「総理65歳以上のスマートフォン保有率が25%突破しました パソコンに関しては使用率5割  
超えていますね」

「少子高齢化を迎える時代になり消費の中核を担うのは若者では無く お年寄りになりつつあるか  
らな」

## スキルショップ

---

大学の卒業を控え以前就職活動をしていたが  
内定は貰えず気分転換にと卒業旅行で地方へ  
そこの観光地のお土産屋さんのとある商品に  
目を奪われた工芸品

ガラス工芸品なのだが色合いが美しく早速購入  
家に帰り私の心は決まっていた

その工芸品を作ってるガラス工房を訪れた

「何か御用かね」

威厳のあるおじいさんが出てきた

「私このガラス細工に心奪われて良かったら弟子にしてください！」

「断る」

「私が女性だからですか？そんなの」

「そうじゃない、今の時代スキルなんとかで修行なんかせんでも何でも出来るだろう」

そう・・・おせっかいな天使様が天から来られて人間に様々な職業の技術を与える

「スキルショップ」

なるものをお作りになられた

そこではお金さえ払えば政治家・医者・弁護士からコンピュータープログラマーや営業マンなどのスキル

漫画家や小説家・音楽アーティストなどの才能まであらゆる職業の技術がお金で買える時代になった

私はしょうがなくスキルショップに行き「ガラス工芸品を作る才能」を買った

近くのガラス工房に行き作ってみる・・・初めてなのに作れるでも何か違う・・・何かが足りない

私は再びあのガラス工房を訪ねた

「また君かね、どうだいガラス細工は楽しいだろう

お金さえ払えば簡単に技術が手に入り作れるのだから

私の時代は右も左も分からない状態から修行したものさ」

「何か違うんです・・・楽しくないんです

大切な・・・何か大切な事があると思っておじいさん・・・いえ師匠！弟子にしてください！」

「わしの指導は厳しいぞ」

「はい」

私は再びスキルショップへ行きガラス細工の才能のスキルを解除してもらった

今では厳しい師匠の下日々ガラス細工の訓練最初はガラス細工を作らせてもらえない

掃除から師匠の身の回りの世話

でも何故か毎日が充実してます♪立派なガラス工芸職人になるぞ！！

## 夏休みの宿題（ニワとリンスインシャンプー）

---

夏休み満喫中

今年は好きなアイドルのライブに行ったり

ビキニ着て友達と海で遊んだり

遊園地でお化け屋敷での肝試し

宿題は明日でいいやって思ってたら

あっという間に夏休み最終日 大変だ！これは完徹決定だぁ～

夕食後机の上には30枚からなるプリント ドリル5冊・読書感想文の為の本と原稿用紙

「あっお姉ちゃん宿題用意しといたよ」

さすが我が妹とばかり宿題に取り組んだ

ん？中学生の私にとって意外と簡単な内容 でもその量が半端無い位多い

一緒の部屋の妹はすやすや眠っている 宿題は済んだのだろうか・・・

一番大変だったのは読書感想文 使いまわしな訳行かず本を読むのに1時間

宿題を終えた後時計に目をやると5時・・・もう朝か・・・ふわぁ～徹夜だった

すると妹が目覚ましの音で起きてきてこう言った

「お姉ちゃん宿題終わった？ありがとう♪それ私の宿題だよ」

## 犬の恩返し

---

ある日僕は近所の公園まで散歩していた

「やーいやーいバカ犬」「まゆげ書いてやったぜ」犬が少年達にいじめられていた

「やめなさい」僕は少年達をしかり犬の頭を撫でつつ

「もういじめられるんじゃないぞ」そう言って家に帰った

夜ふいに玄関のチャイムが鳴った「どちら様ですか？」

「さっきあなたに助けられた犬だ」なんか偉そうだったが嘘をついてる感じじゃなかった

「おっおい勝手に家に上がるなよ」

「恩返しさせて貰うぜ」

オスの犬だったのか

「キッチン借りるぜ」そう言うと何やら料理を作り出した」

「ほら出来たぜ」「まっまずい」

「風呂入るか？背中流してやるぜ」「いたたたたもっと優しくしろよ」

犬は落ち込んでいた「恩返しに来たのにお前に満足させられない」

意を決したのか犬は立ち上がり

「ベットに行こう」「えっ」「俺に出来る最後のコト♪最高の夜にしてやるぜ♪」

「まさか・・・いや。。。やめろおおお」

END

## 新米ママの毎日が幸せブログ

---

2012年11月18日日曜日

タイトル「家族がいる日常」 テーマ「日常日記」

私には夫と2歳の娘そして娘の誕生によって

我が家のアイドルの座を奪われたミニチュアダックスフンドのゲル

家族皆元気で楽しく過ごしていた

でも私を悩ませるのはそう・・・匂い

夫は中年半ば過ぎ加齢臭が出て来て

枕は凄い匂い・・・足も臭い

娘はまだおむつなんだけど取り替えるとき

うん〇やしっこの匂いも気になる

ペットのゲルはしつけされているので

シートに糞尿をするがその匂いしたら・・・

ある時新聞の折り込みチラシで

「匂いが消える方法」と紹介されていたのが

注射で特殊な薬を使い匂いを消すと言う物

でも何もそこまでしなくても・・・

私はその時スルーした

ある日お友達の家遊びに行った

ママ友同士の集まりで初めてのお宅訪問

凄い匂い・・・

家と同じペットを飼っているのだが匂いが・・・

そして他人の家独特の何とも言えない匂い

ひょっとして我が家も・・・

家に帰りあの広告をもう一度読み返す

匂いが消える・・・広告を良く見ると

「効果は3日間限定」らしい

あの日以来匂いに敏感になっていた私

ちょっと興味本位でそのクリニックの門をたたく

先生が用意されたものは注射器と何やら怪しい液体

ちょっと覗いたカルテには「deodorant」文字

3日間で効果は切れるので試しに打って貰った

最近の注射って痛くないって聞いてたけど私には痛い

帰りに娘を迎えに行き家に到着してリビングで休憩

夫から今日は早く帰るって連絡があった

薬が効いてきたのかしっこいペットの匂いが消えて行く

そんな中娘が「うん」って言った

初めて娘の口から聞いたその言葉はトイレの訓練のおかげかな

おむつを取り替える時・・・あれ・・・あの気になる匂いがしない

しばらくして夫が帰宅、玄関まで娘とお出迎え

夫が靴を脱ぎ上がってくる私はその靴を整え・・・あれ・・・

あの足の臭い匂いがしない

試しに夫に近付き匂う・・・気になっていた加齢臭もしない  
あっ洗濯物セットするの忘れてた  
慌てて洗濯機に洗濯物を入れて行く  
夫の枕カバー・・・匂わない  
犬のシートを変える時のあの匂いも気にならない  
ゲルが寂しそうな目でこっちを見ている

あの薬本当に効いてる  
私はちょっとだけ興奮していた  
でも何か大切な物忘れてるような・・・

今日の夕食は天ぷら  
夕食の準備をする時・・・匂いがしない  
素材であるエビやイカ・玉ねぎやかぼちゃなど  
匂いのしない油で揚げ皆で夕食  
匂いのしない食事は苦痛の何者でも無かった

食事の匂いってどんなんだったのだろう  
ゲルの匂い  
娘の匂い  
そして夫の匂い・・・

そして3日後  
この日が来るのを待っていた  
先生のおっしゃるように徐々に匂いが戻ってくる  
思えばこの3日間・・・生きたこちしなかった

嗅覚が戻りつつある中ゲルのケージへ  
・・・うん！この匂い！  
ゲルは尻尾を振りながら吠えてじゃれて来た  
私は娘が「うんちゃん」って言うのを待っていた  
「うん」娘の合図でおむつを取り替える  
この匂いだね、おむつを替えた後娘を抱き締める  
大切な娘の匂い

おっとがいつもより早く帰宅♪  
娘が生まれてから毎日のように早く帰ってくる  
いつものように靴を揃える・・・相変わらず足が臭いねこの人（笑）  
夫にそっと近づき・・・加齢臭・・・(^o^)/

今日の夕食はカレーライス  
夕食の準備、人参、じゃがいもそしてお肉っ！お肉っ！  
大切な・・・本当に大切な何かに気付いた私ははしゃいでいた

夕食が終わり家族で過ごすこの時間・・・大切にしていきたい  
唐突に娘が「うんちゃん」って言った

凄い！ちゃんまで言えた！  
娘の成長を夫と喜び合っていた

続く

## 世界最高齢

---

私のおじいちゃんが世界最高齢だった 115歳  
毎日の散歩が日課で 食事も3食しっかり食べて  
趣味は読書 つい最近までは世界最高齢だった  
だったって？

別に亡くなった訳じゃないよ 抜かれてたんだ

120歳の世界最高齢が居るって分かって

その人は寝たきりで意識が無く脳死状態

鼻からチューブでペーストの食事

点滴で栄養剤入れられ 人工心臓で生きてるおじいちゃん・・・

## 食品汚染問題

---

ある日こんな事件が起こった

「〇×フーズの食パンからカルキ臭がするという消費者からの情報提供がありました」

「社長大変です」

「なんだ？」

「わが社のパンからカルキ臭がすると消費者の一部から苦情が」

「ぬあ〜にい〜」

「あれだけ衛生管理には力を注いで来たのにね」

「水道水は厚生労働省の安全基準を満たしているし」

「工場内のパイプや管も常に綺麗な水で洗浄してますし」

「うん」

「原因は？」

「分かりません」

## おませちゃん

---

ぷるるるる

「あっもしもしSちゃんいますか？」

「おはようNくん」

「今朝の朝刊見た？日銀が金利の引き上げ行いうらしいよ」

「あれねデフレ対策じゃない？」

「何で？ゼロ金利のほうが企業がお金借りるのに・・・あっ」

「ねっ！企業の負担は消費者へ、物価上昇につながるのよ」

「違う形でインフレを起こすのか？なるほど」

「ただのインフレじゃ無いよ！通貨価値が高くてのインフレ！」

「それよりさぁ昨日親に携帯欲しいって言おうとしたんだけど・・・」

「僕たちまだ3歳だよ！やめときなって絶対買ってくれないよ」

「買ってくれたとしてもキッズ携帯だよね～私はスマホ欲しい」

「じゃ今日も保育園で遊ぼうね」

「うん」

「Nくん保育園の時間よ」

「うん、今日のお遊戯楽しみなんだぁ～」

「何するの？」

「お外でどろんこ遊び♪」

子供は子供らしくって言うけど

親の幻想に付き合うのはね

はぁ・・・大人を相手にするのも疲れる・・・

## アニメ

---

私はいわゆるアニメオタク  
日本のアニメは世界で(中略)  
とにかく私以上にアニメに詳しい人はいないと自負してた  
今日はショッピングモールに  
遊びに来ていてふと映画館を覗くと  
「ザ・アニメ」って看板が  
これこれ今話題のアニメ映画  
早速チケットを購入  
館内に入り上映を待つ  
でも待てど暮らせどアニメが始まらない  
ずっと実写でのコメディドラマが  
流れている  
私は席を立ち受け付けに文句を  
言いに行った  
「ずっと実写でアニメが始まらないけど」  
受け付けのお姉さんはあっさりこう言った  
「アニメって題名の実写映画ですが...」

## 光の使徒

---

天国ではこんな話で盛り上がっていた

「イエス様？ルシファ様ってどんな方なんです？」

「光の天使って言う位なもの～素敵な方ですわ」

「ユダヤ教では智の大天使って言う位ですよほど賢い方でしょう」

「いまルシファには地獄の門番を任せておる あやつはひねくれておってのう・・・

確かに光の天使として 他者に光を与える存在！その光によって他者を救う存在として生んだんじゃが」

「ルシファよ」

「なんですイエス」

「どんな人間に光を当て救うのじゃ」

「私は医者のおに光をあて彼らを医者へと導く 私の光を浴びなかつた者たちは患者として彼らのもとへやってくるだろう」

「他には？」

「私はライフセーバーのおに光をあて彼らをライフセーバーへと導く

私の光を浴びなかつた者たちは溺れている所を彼らに助けられるであろう

「私は介護士のおに光をあて彼らを介護士へと導く

私の光を浴びなかつた者たちは老後彼らの世話になるであろう」

## 色鉛筆

---

白人が黒人に

「はだいろの色鉛筆買ってこい」

すると黒人は黒色の色鉛筆を買ってきた

違う違うそうじゃそうじゃなあ〜い

白人は黄色人種に

「はだいろだよはだいろの色鉛筆買ってきて〜」

すると黄色人種は黄色の色鉛筆を買って来ました

白人はキレてこう言いました

「はだいろって言ったら白だろシロ」

すると黒人と黄色人種は言いました

「だったら最初っから白色の色鉛筆って言えよアホ」

## 父から貰った収納BOX

---

幼い頃私は物を片付けるのが苦手だった  
いつも母に叱られていた

ある日父が私に買ってくれた物  
収納BOX  
茶色でシンプルなデザインだが  
私はその優しい色遣いに気に入って使っていた  
大事な物は全て父から貰った収納BOXに入れていた

その父が昨年他界  
一人暮らしを始めてた私は職場で素敵な男性に出会った

年上で包容力もありどこか父に似ている人  
私から告白して交際が始まった

その彼から電話で欲しい物はと聞かれ  
私は収納BOXが欲しいって話した  
私の誕生日の日彼は私に収納BOXをプレゼントしてくれた  
カラフルで多様なデザインだが  
私はその派手な色遣いに心奪われ使う事にした  
父から貰った収納BOXは押し入れの奥にしまい  
中にあった物を彼から貰った収納BOXへ  
彼との交際は順調だった  
職場では付き合っている事は内緒で  
休みの日は彼が考えてくれるプランでデート  
今夜は彼の家に初めてのお泊り  
今まで手も握らなかった二人だけど  
今夜は結ばれるかな？

私は身支度を済ませ出かけようとした時  
ふと押し入れの奥にしまった父から貰った収納BOXが気になった  
押し入れから出して開けてみる  
えっ・・・何も入っていない収納BOXから  
大好きなアーティストのコンサートチケット  
プラチナチケットでファンクラブにも入ってるけど入手できなかった  
どうしよう・・・彼とはまた次の機会にお泊りデートする事にして  
私はアーティストのコンサートへ出かけた

ある日のデート  
喫茶店で彼からこんな事を言われた  
母親が病気で入院する事になったから100万円貸して欲しいと  
早速家に帰り彼から貰った収納BOXから通帳と印鑑を出そうとした  
・・・無い

確かに入れたはずの通帳と印鑑が無くなっている  
彼には後日渡すと連絡した  
ある日の仕事帰り、その日彼は残業あるらしく  
私は手作りのお弁当を持って職場へ  
会社に行く途中飲み物を買おうと  
立ち寄ったコンビニで見ちゃった・・・彼が他の人とデートしてる所  
彼に問い詰めると私より先に他の女性とお付き合いしていて  
私は浮気相手だった・・・二股かけられちゃった・・・  
彼とはお別れしました  
結局彼とはキスはおろか手も握らないまま  
彼から貰った収納BOXは捨てよう  
私は父から貰った収納BOXを押し入れから出して来て  
彼から貰った収納BOXから大事な物を取り出し入れようとした  
あれ・・・父から貰った収納BOXから無くしていた通帳と印鑑が出て来た  
お父さん・・・

その日私はアルバムを開き父との思い出を辿っていた  
アルバムの中の父と一緒に写っている写真  
どの写真も父が私を見ている目は暖かくそしてとても優しかった

## スパイ大作戦

---

俺は知っている 今日本に危機が迫っている事を  
いやもう危機が訪れていることを  
手遅れになってなければいいのだが  
ここに記録を残しブログで発信する  
日本は中国の占領下にある  
2004年4月7日兵庫県北部浜崎漁港に 7人の中華民国のスパイがやってきた  
私は日本の国家公安局の第二保安課に所属する人間だが  
我が国の諜報員が先んじて情報を入手  
日本を含め東アジアを占領する計画「東亜大中華民国計画」なるものを手に入れた  
2014年度までに日本の各主要メディアの重役達を美人局  
すなわちハニートラップで味方にして占拠 ここで彼らは気転を効かせ普段通り番組内容を変えずに  
放送させた  
この事により我が日本国民は普段通り日常生活を送っていた  
間に合わない！！誰かこのメッセージを

~~~~~

日本国 国家公安局第二実務課

以上です

「メディアの方は？」 「重役どころかタレントにまで手を出してます」

「政治家は」 「一部の政治家の間で話題になってました」

「このブログの閲覧者数は」 「2000万人超えてます」

「手は？」 「削除せず次の記事に偽の記事でしたと以下の文章を書き込みました」

~~~~~

「昨日の記事は面白おかしく書いた記事でした

お騒がせしました。」

~~~~~

この記事はフィクションです

## 家族計画

---

自分の部屋のティッシュが無くなった狐君は  
台所からティッシュを取って来ました  
台所のティッシュが無いって気づいたキツネ君は  
洋間からティッシュを持ってきました  
洋間からティッシュが無いって気づいたきつねくんは  
仏間からティッシュを持って来ました  
仏間にティッシュが無いって気づいたおとうさん狐は  
台所へ行きおかあさん狸に言いました

「おい台所のティッシュが無いぞ！」

「はい」

そう言うとおかあさん狸はティッシュを8個買って来て

台所と仏間と寢室に置きました

## 専門のくし

---

新聞の折り込みチラシににあってたちょっと興味を引く記事

「様々な髪形にセット出来るくし！！」

「これであなたの髪形も思いのまま！！」

なんだこれ

そんな触れ込みで売っていたくしは

「中分」

「7：3分け」

「オールバック」

などお好みの髪型にセットできる専門のくしが13本入りらしい

通販なのだが新聞の折り込みチラシなので信頼出来ると思いつつ

私は早速くしを買ってみた

家に品物が届きに鏡の前でそのオールバックのくしでセット

説明書には様々な髪形の指南書があり

オールバックは

「ワックスを付け前髪から後ろ向きに髪をとく」

・・・・はあこれってひょっとして？

## 手紙

---

手紙か・・・

「親愛なる君へ」

「・・・何？」

「私は今ニューヨークに居ます」

「何だこれ？」

「近々日本へ行く用事がありますのでぜひお食事でも・・・」

「さっぱり言ってる意味が分からない・・・」

「貸せよ！」

「何だよ」

「この程度の英語も分からないのかお前は」

## 配役注射

---

幼い頃家族団らんの時  
皆こぞってテレビにかじりついた  
そこには憧れのスター達が華やかな世界を彩り  
やがて僕の運命をも左右する  
そう左右してしまう事になろうとは・・・

大学を卒業した僕は家族の反対を押し切りとある劇団に所属した  
役者になりたかった  
ドラマ・映画・舞台などで配役になりきりまるで  
ベテランになるとまるで別人の様に

しかしそこで待っていた物は想像を超えた厳しい世界だった  
小さな劇場周りで役など貰えずひたすら修行の日々  
狭い部屋に劇団員が男女関係無く雑魚寝しては寝食共にして

「おい如月！！」  
「はい」  
「お前の本気はその程度か！！」

(うわ～鬼軍曹今日も如月先輩のこと怒鳴ってるよ)

ある日舞台終わりで銭湯に行った時の事  
隣に居た妙な客・・・行商に声を掛けられた

「あんた役者かね？役者は感情をコントロール出来ないとダメだよ」

何が分かるんだよ素人に・・・と思いつつその男の話に付き合った

「いいか姿や形はその場では変えられねえまあ特殊メイクしたら話は別だが  
声色にも限界がある・・・で役者に必要なのは何か分かるか坊主」

なんだろう・・・

「役者にはな（魂）これだ己が心を意のままにコントロール出来れば  
どんな役だってこなすことは出来る」

脱衣所でその行商に進められたのはトランクケースに入った注射器と各液体の瓶

「刑事・探偵・エリートサラリーマンにハンサムガイからダメ男まで  
何でも演じ分けられる薬だよ、良かったら試してみな」

怪しいな・・・第一注射器なんて持ってて良いのだろうか・・・

「お幾らですか？」

「タダで良いよ、どうせこんなもの使う役者は大成しないからね、見返りは期待しない」

一応貰ったのは良いが説明書が無い

そんなある日俺は初めて役を貰った！主役級だ・・・と言ってもゲイの役だけどね  
だれもやりたがらない訳だ男同士でキスシーンまである

え～いこの薬だ

(同性愛者の役の薬)

舞台が始まった、初めてスポットライトを浴び台詞を  
お腹の底から吐き出している  
緊張はしている・・・が一向にあの薬は効いてこない  
舞台が進むにつれ物語の中に自分の・・・  
しいて言えば自分の演じている役が同化して  
一つの作品になっている皆で作りに上げている喜びのようなものを感じていた  
あんな薬に頼ろうとした俺がバカだった

舞台は終わり汗だくになった俺は団員が引き上げていく中  
一人舞台の袖で感極まっていた  
自分にとっての役者としての第一歩

そこへあの鬼教官が

「如月！今日は見直したぞ！よくやったな！」

「教官♪えっ・・・何だこの感じ・・・あの薬が今頃になって・・・」

「どうした？如月？目を潤ませて・・・お前・・・まさか・・・」

「ダメだ・・・感情が・・・抑え・・・ら・れ・な・い・」

「教官♪」

## 不景気こそ幸せ

---

「最近わが社の景気はうなぎのぼりで給料を社員に払うのが大変で」

「そうですか・・・」

「そちらのお仕事はどうですか？」

「我々の仕事は不景気の方が良いんです」

「えっ？不景気だと社員の給料とか払えないんじゃ・・・」

「天使ですから死者を相手におしごとしますよね？

神によって戦争とか犯罪とか無い平和な世界になればなるほど給料が増えるんです♪」

## チケット

---

今日はいつも見ていた憧れのタレントが出ているテレビ番組の公開収録  
大人の人にもらったチケットで参加してきました  
初めてテレビ局へ行った。道が混んで大変・・・  
でもってテレビ局へついた私は警備員へ挨拶した  
警備員にそのチケットみせて中へ  
「おはようございます」  
意気揚々とテレビ局の中へ  
まるで迷路みたい～昔、裏山で遊んでた秘密基地を思い出すな  
よくあの子と敵、味方分かれて戦争ごっこしてたっけ・・・私女の子なのに  
いつも私は秘密基地で守られるお姫様・・・

味方の王子様のN君今東京で証券会社に勤めていて綺麗な奥さんに娘さん2人  
ペットはジャイアントシュナイザー

ウルト○ンのM君相変わらずバイクが好きでそれに講じて  
H○N○Aのバイクのデザイン設計を任されるまでになりました結婚はしてないけど  
浮気者だから（笑）

そういえば敵の友達の今何してるのかな？  
凄いな～あのタレントさんいつかあんなタレントになって憧れてテレビ見てたけど  
まさかテレビ局に来れるなんて夢みたい

さて明日から仕事大変だなでも自分で選んだ道だもの  
頑張らなくっちゃね、コンビニのバイト♪

## 一日遅れの占い

---

「今日の占いはっと・・・」

私は人生で良くも悪くも占いをあてにしていた  
これが良く当たるんだ  
自分がどう行動したら良いのか  
何に気をつけたら良いのかとか  
恋愛とか金銭とか・・・

ある日占いサイトで

(友人と喧嘩してしまいそう)

ふ～んまあ気をつけていればいっか  
しかし占いどおり友達と喧嘩してしまった  
ほんのささいな事だった  
約束していた食事会を風邪で欠席  
その事を前もって言ってなかったのが問題

次の日私はいつもどおり占いから一日が始まった

(今日は友人関係に気をつけて些細な事で  
喧嘩しそう)

今日も友人と喧嘩するのか・・・誰かな？

しかしその日に限って占いは外れ

喧嘩した友人と仲直り

「ごめんね・・・」

「うん！」

占いが外れてもとても良い日だった

次の日また占いから始まる一日

(喧嘩した友人と仲直り出来そう)

えっ・・・

これって昨日の出来事じゃ・・・

その次の日も次の日も前日の出来事が

占いサイトに乗ってる

なんで・・・

するとある日その占いサイトでこう書かれていた

（大変ご迷惑お掛けしております。占い師のM氏が  
イギリスへ留学しているのでサイト利用の場所によっては時差が生じています）

## ぼじぬ

---

今の時代何でも分かっちゃう  
交友関係の広い私は分からない事があれば  
すぐに人に聞いちゃう  
それでも分からなければネット検索

ある日喫茶店で友達と待ち合わせしていた時  
隣の席のカップルがべちゃくちゃ喋ってた  
彼氏かぁ～最近恋愛にまったく縁がない

「んでさ～・・・ぼじぬあれ面白いよね」

ん？ぼじぬ？ふいにそのカップルから聞こえた  
その「ぼじぬ」と言う単語が頭から離れなかった

「おまたせ～」  
私はやって来た友人にさっそく  
「ぼじぬって知ってる」  
ん～私は分からないけど・・・それよりさ  
友達との会話そっちのけでカップルの話に  
聞き耳を立てていた

その夜  
パソコンを使ってネット検索してみた  
・・・ぼじむとかぼじむ・・・とか  
文章に意味無しの単語として出てくる

ん～なんだろうぼじむって  
気になったらとことん調べたい  
大学で友達だけじゃなく  
ありとあらゆる人に  
「ぼじぬって何か知ってますか？」

・・・誰も知らない・・・  
どうしよう・・・気になって眠れない

街を歩いてる人次々に

「ぼじぬってなんですか？」

聞いて周っているとお巡りさんに声をかけられた

「お巡りさんぼじぬってなんですか？」

私は精神病院に入院させられた

ベットでうわごとで話してる

「ぼじぬってそう言う事だったんですね～ふふふ」

## 少女漫画

---

(あらすじ)

私は美園（みその）少女漫画を愛する小学生  
少女漫画みたいな恋に憧れてるの  
クラスメイトの薫（かおる）は絵がとっても上手  
私は絵が下手で薫に絵の描き方を伝授され  
コンクールに応募したの  
結果は・・・見事合格！  
でもその事で薫との関係が怪しくなり・・・

## my diary

---

It is fine today.

It went to the library yesterday.

He met the American friend.

The flower bloomed in the old tale.

It will go to have a meal together shortly.

Incidentally I cannot speak English.

## 最後の一本

---

そう言えばタバコを吸い始めたのは高校生の時  
大人に憧れていて好奇心からタバコを吸った

今になっては後悔している  
何度も禁煙にチャレンジしても失敗続き

そんなある日私の元に天使が現れた  
「次で最後の一本ですよ」

そうか！遂に禁煙に成功するのか！  
私は最後の一本を吸い終えた

吸い終わった後私は倒れ意識を失いそのまま死んでしまった  
今思えば脳出血だったらしい  
ようやく禁煙出来た・・・

## 貯金箱

---

幼い頃からせつせと貯金していたお気に入りの貯金箱  
大きいサイズでお小遣いからお手伝いの駄賃など  
その貯金箱は父親に買ってもらったものでかなり頑丈な作り  
鍵まで付いていて当時喜んだものだ

大人になってすっかりその貯金箱の存在を忘れてしまっていたとき  
次の給料日までの財布の中身が少ない事に気がついた  
そんな折押入れを整理していた時その貯金箱を見つけた

重たい・・・かなりの金額が入ってる

しかし鍵は無くして缶切りでは開けられない代物  
私は無理やり鍵穴をこじ開けようとするも失敗  
ドライバーで開けようとしても空かない  
遂に鍵屋さんを呼ぶ事に

「これです」

「貯金箱ですか？この鍵？分かりました」  
鍵やはあっさりその貯金箱の鍵を開けた

「代金は1万5000円になります」  
私は銀行からお金を下ろし代金を支払った

中身を開けて金額を確認して落胆した  
「9997円・・・」

## 完璧な役者

---

「ああ今度映画を撮る事になってね役者探してるんだ」

「どんな俳優が良いんですか？」

「コンビニの店員だよ、リアルさを求める」

「なら例の芸能事務所に頼めば」

「どんな俳優が揃ってるんだ？」

「本物のコンビニ店員からキャビンアテンダントまで

本当に現場で働いてる人間を役者として登録してるんです」

## 未来のニュース番組

---

俺は知っている  
未来が分かるニュース番組がある事を

地方に住んでいる俺は冬の降雪に悩んでいた  
そう・・・テレビ  
アンテナが雪で覆われ上手く電波が受信出来なくて  
テレビ画像が乱れる  
毎年年末年始特番なんか観られたもんじゃない

そして意を決してケーブルテレビに変えた  
ケーブルテレビだとアンテナは必要なくテレビが観られる

ちなみに多チャンネルの契約も結んだ  
有料で既存の国営。民法だけでなく色んな専門チャンネルが楽しめる  
そこで見つけた番組

### 「FOX vs Raccoon dog」

この番組はニュース専門番組らしく  
最初見ていた時起きてない事件事故などを伝えていた

しかしその事件・事故が未来で起こるのだ  
私はそれらの事件をこのテレビ局が起しているのでは無いかと疑い  
SNSの書き込み投稿した

ある日そう忘れもしない！  
俺の事がニュースになってた  
俺がバイク事故で死ぬってニュース  
名前も住所も年齢も職業も俺

俺は怖くなりその事故の日ずっと家に居た  
すると何事も無く過ごせた

俺はそのテレビ局に招待され向かった  
すると受付でこちらですと通されたのはスタジオ

多くの観客の前でアナウンサーにこう言われた

「さあ皆さん拍手を持ってお迎え下さい  
未来の運命を変えた人物です！」

## 未来からの手紙

---

じりりりりり

セミの鳴き声が夏を感じさせる夏休み  
高校生の僕は大学受験のため自宅の部屋で勉強していた  
将来は警察官になろうと思っていた  
大学卒業後に警察学校へ進路をとろうと  
1通の手紙が来るまでは・・・

カタン

狭い部屋に居ても聞こえるポストからの音  
進学校に入るため実家を離れ一人暮らし

ん・・・

すぐに違和感を覚えた  
差出人は私だったから  
でもよくあることだ、子供時代未来の自分に宛てた手紙が届けられること  
しかし字は綺麗でとても子供時代の自分が書いたものでは無い  
中身はこんな感じだった

(過去の俺へ

元気してるか？未来では警察官で妻と子供2人の生活をしている  
まあ平凡だが幸せな生活を送っている  
お前の今付き合ってる彼女・・・妻ではない  
上手別れて新たな出会いを待ってくれ)

いたずらか？しかしこの手紙には過去の自分の事を詳細に伝えており  
不思議とこの奇妙な手紙に夢中になった

俺はとにかく人に命令されるのは嫌いだった

そして大学も卒業して警察学校へ  
学生時代からの恋人と結婚  
あの手紙の通りにはしなくなかった

警察官になり娘も生まれ平凡ながら生活してた時  
娘の誕生日にとふと立ち寄ったファンシーショップで見かけた

「過去の自分へ手紙を送ろう」  
のポップに目が行き思わず買ってしまった  
何故ならあの時未来の自分からと送られてきた手紙にそっくりだったから

過去の自分に何書こう

(過去の俺へ  
今は警察官になり高校時代から付き合っていた彼女と結婚  
娘も一人いて平凡だが幸せな人生を送っています  
あとやり残したことは実は妻も好きだったが初恋の彼女  
俺の事好きだったって同窓会で言われた・・・}

郵便局に行き切手を貼りポストへ投函

数日後

その封筒が家に届いた  
しかし私が出した手紙ではなく未来の自分からの手紙  
(おい・・・いいか大事な話があるよく聞け  
絶対にあの手紙ファンシーショップで見つけ  
過去の自分宛なんて感じで送るなよ！！  
今朝起きたら妻と息子が居なくなっていて  
変わりに学生時代の彼女と娘が居た  
すぐに妻に連絡したが別の男性と結婚していて  
妻はいい・・・でも・・・でも息子が居なくなった！！  
俺の記憶まで変わって・・・)

まるで書きなぐった感じの手紙に背筋がゾツとした

私はすぐに過去の自分へ手紙を書いた  
私の大切な娘の寝姿を見ながら淡い希望を抱いていた  
果たして間に合うだろうか？  
私は手紙の最後にこう書いた

(絶対俺の言うとおりの人生を歩んでくれ)

## 魔法のレシピ

---

結婚して8年

夫と小学生の娘の3人暮らし

悩みの種は・・・

「出来たわよママ特製オムライス」

「ああ・・・」

「おっ・・・美味しそうだねママ」

料理がダメダメな所だった・・・

そんな中唯一家族が認めてくれてたのは

「ねえママお味噌汁作ってよ」

「うん今日はおかずそれだけで良い」

「はいはい」

そう亡くなったお義母さんから教わったお味噌汁

キャベツに豆腐、しいたけに大根など具沢山な物

料理の出来ない私にとって魔法のレシピだった

ある日本屋で

（絶対に料理が上手くなる料理マニュアル本）なる物が

家族にあ～だこ～だ言われるのもこれが最後

驚かせてやろうと本を買い密かに勉強した

「出来たわよ～ママ特製半熟卵のオムライス～」

「ああ・・・？美味しそう！」

「うん！もぐもぐ！美味しい！どうしたんだい！」

「本当にママが作ったの？」

それから夕食が家族にとって楽しい時間になっていった

「出来たわよ～しらすいりめんたいパスタ」

「出来たわよ～おもちのせチーズハンバーグ」

「出来たわよ～牛ヒレ肉の赤ワイン蒸しポタージュ仕立て」

「美味し～い」

「うん美味しいね」

料理が美味しいと食卓も雰囲気良くなり家族団らんも深まる感じ

さして明日はどんな料理で家族を喜ばせようかしら

久しぶりの日曜日

今日の夕食は何にするか家族で話し合った

「ママアレ食べたい」

「アレね」

「うんアレ」

「パパもアレだな」

「出来たわよ～おばあちゃんのお味噌汁」

「う～んやっぱ美味しいね」

「うん最高だよおばあちゃんのお味噌汁は」

やっぱり家族にとっての魔法のレシピはおばあちゃんの味だった

## 母の想い

---

お母さんが新しい上履きを買ってくれた  
なのにわざと土を付け少し汚していた

お母さんが新しい鉛筆を買ってくれた  
なのにわざと削って少し短くした

お母さんは料理が上手  
なお弁当は手抜き

なんでだろう  
新学期新たなクラスに一人いじめっ子がいた  
彼は新学期になり新しい上履きを  
履いている児童になまいきなんだよと  
新しい鉛筆を持った生徒にも  
なまいきなんだよと  
弁当の時間カラフルな弁当を見ると  
なまいきなんだよと  
そっかお母さんはこの事を心配して

僕達クラスメイトが勇気をもって  
いじめっ子に言ったんだ

「友達になろうよ」

クラスからいじめがなくなった  
お母さんにその事を言うと  
明日のお弁当の日楽しみにねって

翌日  
僕は弁当箱を開けてびっくり  
玉子焼きやタコさんウインナーに  
ミートボール,ご飯にはふりかけが  
残さずたくさん食べたよ

## リアルRPG

---

某ゲームメーカー

「新しいRPG作ろうと思うんだが」

「それ良いですね」

「早速準備に取り掛かってくれ」

「すみません」

「はい」

「ここのお店武器屋にして貰えませんか」

「えっとこの武器とこの防具」

「だったら最強の武器置いてくださいよ」

「いえ最初から最強の武器だとゲームバランスが崩れるんで」

「すみません」

「はい」

「この教会でお祈りする人達が現れるので

よろしくお願いします。あと死者を復活させるのと」

「すみません」

「誰だ」

「この城に宝箱置かせて貰いたいんですけど」

「私が魔王と知ってのことか！！」

「ええ あとあなたを倒しにやって来る人達が現れるので」

## ネオかくや伝説

---

かくやが目を覚ますとそこは真っ暗  
一筋の光は何か穴みたいな所から差し込んでいる

「これって月明かり？」

かくやは身を乗り出してその穴を覗き込んでみると  
故郷の月が・・・

「明日は満月の夜ね」

かくやは早速持ってきたお弁当を開けた  
すると母から手紙が入っていた

「かくやへこの手紙を読む頃にはかくやはもう  
少女から大人へと変わりつつあるでしょうね  
安心して下さい竹から出るまでは大人の体へは  
成長しませんから・・・笛を吹いて  
美しい笛の音を母に聴かせて下さい  
そして待つのです。必ずその時が来ます。」

「笛？」

かくやは笛を取り出し早速吹いてみた  
するとあたり一面黄金に光り輝き笛の音は  
後に母から聞いたのだが月にまで届いたのだとか

早速かくやは外に出るために笛を吹き続けた  
~~~~~

月にて

「大丈夫ですか？かくや様ずっと笛吹いてらっしゃいますけど」

「何かあれば使者を發てる案ずるでない」  
~~~~~

27 days later

お母様 . . .

お父様 . . .

サキ . . .

飴もあと一個 . . .

空腹に耐えかね飴を必死でほおぼる姫

眠い . . .

笛を吹くのをやめ . . . 眠りにつく姫だった

. . . . .  
.

いつものように竹やぶに入っていった私は暗闇の向こうに

黄金に輝く竹を発見した

私は怖くなりその場を立ち去りこの事は自分の胸の中に隠し  
数刻の時間が流れた

「新かぐや伝説」

ある満月の夜の出来事だった

街が慌しい

どうやら月から使者が現れたらしい

続々と月からやってくる使者達におののきつつ者や神秘的に感じる者  
彼らは私達の元へとやって来た

「姫を迎えにやって来た」

. . . ?

「姫って？」

「姫だ！十数年前竹やぶに誕生した姫だ」

あの時の黄金の光・・・もしや

事情を話すと使者たちは慌てふためいた

急いで裏山の竹やぶに行きその竹の前へ

・・・異臭が漂う・・・さしずめ死臭か

「慎重にな・・・」

竹を割ってみた

中からは絶命したかぐや姫が

内側からかきむしった跡であろう爪の跡も見つかった

あの時私が竹を割っていさえすれば・・・

悔やんでも悔やみきれない・・・

.....

竹の中で絶命していたかぐや姫

使者は悲しみにくれその亡骸に祈りを捧げていた

ピクッ

ん？まだ息がある！！

「すぐに月に連れて帰る」

すぐ月に連れて帰り医者が持っていた気付薬を飲ませた

数日後

気が気ではなかった

高熱は続き咳き込むかぐや

でも息を吹き返した証拠でもあった

「ここは？」

「月ですよ、かぐや」

「生きてるの私？」

「ええ。危ない所でしたよ」

「お父様とお母様は凄い歳を取られて

サキは？・・・亡くなったのね・・・」

「しかしかわいい子には旅させよってあるが  
竹の中に入れた事が間違いだったな」

「お父様。お母様また地球へ行きたいです」

「そうですね・・・今度行けばもう二度とかぐやとは会えませんね」

「なぜ？」

## ふろうにん

---

今日は彼女と前々から楽しみにしていた映画を鑑賞しに  
映画館へ足を運んだ  
二駅くらい離れた所にある繁華街の映画館  
田舎者の私達にとって初デートが映画ってのもありきたりだが  
何より男女で都会に出て行くのがドキドキだった

映画館に着くなり私はパンフレットを購入

ふろ・・・ふろうにんってこれ下さい  
彼女はグッズ売り場で品定めしている

今回彼女と観に来た映画は  
「ふろうに侍」と言う映画  
原作コミックが大ヒットしTVアニメ化もされた  
ふろうにんの侍が活躍するスペクタクル時代劇  
アクションシーンも売りだ  
話題沸騰の映画だ

まだ上映までに時間がある私は椅子に腰掛け  
それにしても彼女が気になる

そう言えば付き合い始めてまだ1ヶ月も経たない  
キスどころか手も繋いだ事無い

ちなみに彼女には今日どんな映画を観るのか言っていない

「さてポップコーン食べながら観る？じゃ飲み物もいるね？」  
映画といえばポップコーンにコーラが定番  
この間一人で映画館に来た時ジュースを思いっきりこぼしている人を見かけた

「私チケット買ってくる」

「じゃふろうにだよ」

何かこういうのって良い  
例えば彼氏が出張先からおみやげ買ってきてくれたり

彼女が手料理作ってくれたり

恋人同士がお互いを意識しあって行動するさまがなんとなく優越感に浸れる

シアター4か

早速席に着くなりポップコーンをほおぼる僕

隣の席の人が咳払い

結構他人の食べる音って周りに聞こえたりする物

長いマナーの告知や映画の宣伝を観終わった後

いよいよ

ん？舞台は・・・明治時代ってかこれ現代の東京？

なんだ？ホームレス？・・・まさか！！

あっ女の人がホームレスの集団に！！

これって

急いでパンフレットを見た

「ふろうにん～肉欲の解放歌2～」

となりで彼女が恥ずかしそうにそして僕を見る目が

軽蔑してる眼差し

事のなりゆきしだいではと思ったが

言い訳する間もなく

僕の恋もふろうにん・・・

## 家庭調理師免許

---

20xx年

政府は新たな法案を国会に提出した

その名も「家庭調理師免許交付法」

平和な国をより犯罪の無い社会にすべく

家庭で主婦が調理する際に免許制にして

刃物を管理する事の出来る免許を交付

ホームセンターなどで刃物を購入する際も

免許証の提示が必要になる

より平和な社会を目指して...

## プチショート・ショート

---

私が考案した本当に短いショート・ショート集です  
短い文章の中にウィットに飛んだアイデアが詰まっています

## 食べ放題・飲み放題

---

ソフトドリンク飲み放題、おつまみ食べ放題、  
野菜、惣菜食べ放題。 ビールも飲み放題  
お肉は別料金

## 中国製品

---

あっこれ中国製品だ

裏にMADE IN TAIWANって書いてある

新発売無糖コーヒー発売

---

期間限定シュガーシロップ付

## 絶対消えないボールペン

---

もしもの時のための  
絶対に消えないボールペンの字が消える消しゴム付

## たばこ税値上げ

---

たばこ税を一箱あたりにかける国のお話し

政府「たばこ税を現在一箱400円から2倍の800円にする」

たばこ会社「一箱20本入りを40本入りにしましょう」

## アルバム

---

「ねえこの子の為にアルバム買ってきて」

「分かった」

「一杯写真あるからねえ～Mちゃん」

「買ってきたよ幼児用の童謡が入ってるアルバム  
さっそく聞いてみよう」

「・・・」

## 「自動」車

---

「この車は自動で運転します」

「本当ですか？」

「はい「自」分で「動」かして運転するんです」

## 先輩と後輩

---

後輩「先輩に何が出来るって言うんですか！」

先輩「お前の足元を見ていて浮き足立ったら救ってやるさ」

キラキラネーム

---

命名

佐藤 \$ % &

## マンガはガマン

---

マンガを読もうとして僕は先に勉強をした  
テレビもラジオも好きなアイドルのBDも我慢（ガマン）して

## 意味を理解すると怖い話

---

ここからは意味を理解すると怖い話です

何気ない文章・・・読み返してみると???

あなたの背筋をぞっとさせまたへえ～って思わせる

そんな作品群です

## どこかでお会いしましたか？

---

・ どこかでお会いしましたか？ ・

葬儀社で働いている私  
最近私はとある男性が気になっていた  
いつも通勤電車で会うのだが  
どこかで会った事のある男性  
毎日顔を合わせる度に  
どんどん気になって行く  
募る思い ある日  
いつもの様に通勤電車で... 私は勇気をだし声をかけた  
「あの～以前何処かでお会い・・・しましたか」  
すると男性は当たり前のようにこう言った  
「はい！会ってますよ！」  
私はどこで会ったのか思い出せずにいた  
「どこでお会いしましたでしょうか？」  
するとその男性はこう言った  
  
「生前にお世話になっております」

## 光の天使

---

私は教会へと足を運んだ  
ミサが行われており厳かな雰囲気の中  
その一枚の絵画があった  
「失樂園」  
その絵を私は食い入るように見て記憶して  
自宅のアトリエに閉じこもり3日3晩何も取らず  
ただひたすら絵を描き続けた  
そして半年の月日が流れた  
出来た！！目の前に神々しいルシファ様が！

## 赤ちゃんチャット

---

神が降臨して以来  
夫婦が子供を作るとき  
赤ちゃんチャットなるもので  
お腹の中の赤ちゃんすなわち  
生まれてくる我が子と対話する  
ここにもやっと神から授かった 我が子とチャットする夫婦がいた  
私は女の子！ 勉強をしっかりと  
運動もしっかりして  
お手伝いもしっかりして  
悪い事は絶対しない  
絶対に嘘はつかない正直な子として  
パパとママの娘として生まれてきます

そして夫婦の間に元気な男の子が生まれた

## サンタクロースがやって来た

---

クリスマスの日

母子家庭

僕は興奮していた

仕事から帰って来たお母さんに報告

「お母さん！僕サンタさんにあったよ！静かにしてって言われて静かにしてたらいい子ねって静かにしてててねって誉められた！でもプレゼントくれなかった...」

お母さんはすぐ警察に電話した

## トンネル崩落事故

---

私は高速道路を下っていた

ふいに目の前の看板に (この先トンネル崩落事故通行止め) なる文字が

しばらく車を走らせていると

事故車両らしき車と頭から血を流してる男性が「どうかされましたか」

「この先のトンネルで事故に遭いまして 私の周りに岩が落ちてきて 前も後ろも塞いでしまっ

私はその日のニュースでそのトンネルが完全に岩で塞がっている映像を見た

## 赤ちゃんはどうやって生まれてくるの？

---

幼少の頃 ふいに疑問に思ったのが

「赤ちゃんはどうやって生まれるの？」

その時両親は「結婚したら神様から授かり コウノトリが運んで来るんだよ」と

現在付き合っ2年になる彼女がいる

来月には結婚するので子供を迎える準備をしなければ と思っていた矢先

浮気していた別の女性から妊娠したと連絡があり「結婚したんだ！おめでとう！」

と言うとお腹の子は私の子だと言う それはありえない

浮気相手と結婚してないし するつもりも無い...

## 喋るインコ

---

ようやく私たち夫婦に待望の赤ちゃんが生まれた  
元気な女の子の名前は・・・まだ決めて無いです

「おかえり・おかえり」  
家ではペットのインコが出迎えてくれた  
赤ちゃんの部屋はこの喋るインコが居る部屋になり  
これからの子育てを一生懸命頑張ろう  
生後3カ月になり赤ちゃんはすくすく育っていった

夫の帰宅だ  
真っ先に赤ちゃんの所へ来てあやす  
私はちょっと嫉妬しながらもこの幸せが  
永遠に続きますようにと願うばかり

ある時「泣いてる・泣いてる」と  
インコが喋ったので様子を見に行くと  
赤ちゃんが大泣きしてた知らせくれてありがとねとインコに言った

ある時  
昼食を作っていると  
「熱がある・熱がある」  
インコが喋る  
私は急いで赤ちゃんの所へ  
熱を測ってみる・・・何とも無い  
もうインコちゃんたら驚かせて  
するとインコは  
「寒気がする・寒気がする」  
「体が痛い・体が痛い」  
インコの発言が尋常ではなかったので  
私は赤ちゃんを連れ救急病院へ  
検査をして貰ったが異常なし  
夫も駆けつけた  
「何とも無いみたい」  
「とりあえず無事で何より」  
家に帰るといつも喋るインコの声が聞こえない  
鳥かごを覗くとインコは死んでいた

## 真実を写す鏡

---

私は今持っている鏡に満足していなかった  
そこで気の向くまま旅行先でふと立ち寄ったのが骨董品店  
おばあさん一人なのに多くの商品が所せましと並べられている  
「ここおばあさんお一人で経営なさっているのですか？」  
おばあさんは無言のまま一つの商品を出してきた

鏡

「これ買います!!」  
私は自宅へ帰り鏡を覗きこんだ あれ♪何か綺麗ね私って♪」

「ねえ知っとる？ あそこの骨董品店ってバツタもんしか売らへんねん  
以前私あそこで鏡買うたんやけど普通やったで」

## 写らないカメラ

---

新しく買ってきたカメラなんだけど  
まったく写らない・・・  
修理に出してもどこも壊れてないらしく  
メモリーカードも入ってる  
もちろんバッテリー充電OK  
なのに写らないカメラ  
なんでだろう

## 食物連鎖

---

ある日蜂は花の蜜を吸いましたその蜂は死んでしまいました  
その死んだ蜂をアリたちは自分の巣へ  
アリたちはアリクイに食べられました  
そのアリクイをライオンが食べました  
そのライオンをハンターがしとめて肉を調理して食べました  
ん？

また蜂がやってきます  
あれだけ強力な農薬・有害な薬撒いたのに・・・

ゲシュタルト～狂い出した歯車～

---

yami story's

ゲシュタルト～狂い出した歯車～

一つの設定で様々な物語を紡ぎだす本作

PM3 : 00

私の名前は愛美

今日から無人島での楽しいキャンプが始まります

皆私の誕生日忘れてるのかな？

でも友人たちと過ごすこの時を大切にしていきたい

「まてえ～」 「やめてよもう子供じゃないんだから」

哲夫と優子

中学生の時から付き合ってるみたいで

大学のサークル内でも有名なバカップル

「ねえせっかくのキャンプなのに本読んでるの？」

「うるさいわねえ～あっち行っててよ」 高志と京子

高志は誰にでも優しく気軽に話しかけてくる

女の子にあんなに接近して話しかけてくる男子は今時珍しいね

京子は本が大好きな文学少女って行ったところかな？

私が推理小説が好きで本好きで意気投合！

京子はファンタジー小説が好きで時折優しい表情を浮かべながらいつも本を読んでいる

「みなさ～んジュースいかがですか？」 大森君 みんなのパシリみたいな存在だけど

良く言って弟のような可愛い後輩

そして・・・ 「どうした愛美？なんか浮かない顔だぞ？」 「ん？別に」

私の彼氏の聡 大学に入ってサークルに誘ってきたんだけど

一目惚れで2年になった時勇気を出して告白 付き合うようになってまだ半年

この間初めて彼の部屋でキスした時は人生で凄く緊張したよ

このサークル仲間たちと2泊3日で瀬戸内海の無人島ゲシュタルト島へキャンプをしにやって来た

島は地元の観光協会が管理していて島には管理人夫婦とアルバイトの女性一人が居るだけ

今日は完全に私たち貸切です

PM4:30 島に到着すると管理人夫婦さんがお出迎えしてくれた

「ようこそゲシュタルトへ疲れたでしょさあ」 私たちは小型バスに乗せられキャンプ場へ

そこはコテージが5つあり近くには清流が流れている セミの鳴き声が夏を演出してくれている

清流のせせらぎを眺めていると聡が管理人さんから鍵を預かってきた

荷物置こうと部屋割りを言う聡 「僕と優子は同じコテージだね」 「もう何する気なの哲夫♪」

・・・

「高志と俺だな」

「ねえ聡と愛美付き合ってるんだから二人で同じコテージにしなよ」 ナイスパス

「そ・・・そうか？どうする愛美？」 「うん・・・聡が良ければ一緒にいいよ」

「じゃ俺は京子と～」 「あんたは大森君と！私は一人で良いよその方が静かで本読めるし」

おのおのコテージに行き荷物を置きに行ったただ気になったのは大森君の荷物がやたら多い事・・・

「早速飯の準備するか？」 やっぱキャンプの醍醐味って行ったらご飯でしょ

「やべえ肉忘れてきた」 「嘘でしょ！何やってんの哲夫！！」 「うん嘘」

「もう哲夫ったらあ～優子驚いちゃった♪」 また始まった・・・

「飯の用意は俺たちがするから女子は休んでなよ」

「じゃ私コテージに居るから出来たら呼んで」「私も手伝うよ」「ああじゃあカレー頼む」  
キャンプといえばカレーである。オーソドックスだが嫌いな人は居ないと思う

PM5：15 「よし出来た京子呼んで来てくれ」大森君がさっそうと京子さんのコテージへ  
「とり皿一つ足りないね」「大森のやつに頼んだんだけどあいつ7人居るのに6人分しか用意してないんだ」

・・・うぎゃあ～??? 「どうした大森！」血相を変えて走ってきた大森が信じられない事を言い出した

「京子が・・・死んでる！」??? 「何行ってんの？冗談でしょ？」

皆でコテージへ・・・きゃああそこで見た物はソファで胸にナイフが刺さった状態で血だらけの京子だった

「管理人に知らせなきゃ愛美来てくれ」「・・・」「愛美!」「うん」「哲夫達はコテージで待機しててくれ」「私怖い・・・」「じゃ聡達が戻ってくるまで俺たち4人は高志たちのコテージで待ってよう」

どんどんどんすいません!!管理人さん!!「ハイ・・・どうされました?」「京子が・・・仲間が死んでるんです!」「ええ!それは大変だ」管理人夫婦をつれ京子のコテージへ戻ってきた私たち「んと104ここです」???

あれ?

そこに京子の姿はおろか辺り一面の血が綺麗に無くなっていた

PM5：30 高志たちとも合流した「確かにここだよな104京子のコテージだよ」「あんたがた幻でもみたんじゃないのかい?」「本当に殺されてたんです!現に京子いないし・・・」「まだ殺されたって決まったわけじゃ無いだろ?」

自殺?

「この島に居るの我々だけですよね?」「あとうちのバイトの子がいる」「今どこに居るんです?」

「それが・・・PM4時頃ちょっと出かけてくるって行って」

とりあえずご飯を食べた私たち・・・生きた心地がしない

味がよく分からない・・・でもこんな時でもお腹が空くもんだと驚いている

「警察には私たちが連絡しておきますので今日は・・・」「定期便は明日にならないと来ないんです」

「いやよ私!こんな事件が起こった島で一晩明かすなんて」

「ひょっとして俺たちの中に犯人がいるんじゃない・・・」「高志何言ってるんだ!」

「私哲夫と二人きりでコテージに居る!」そう言うと哲夫と自分たちのコテージへ戻っていった「じゃ大森お前外で寝ろ」「ええ何で?」「俺は一人で過ごすじゃ」「何て薄情なんだうわあ」

「大森君私たちのコテージに来なよ」「うん!」

PM7：00 静かな夜・・・静寂って言うのかな 部屋のエアコンが24℃に設定されていて快適に過ごしつつ私はある思いを巡らせていた「愛美何やってるの？」「このパンフレットの地図・・・コテージが5個 哲夫と裕子のコテージ101 大森君と忠志のコテージ102 京子のコテージ104 そして私たちのコテージ103 空きコテージ105が1つ・・・「ねえ聡105に行ってみない？」ここで私の推理が光る

「あの時大森君が連れて行ったコテージパニックになっていて番号見るの忘れてたけど京子が居たの104だった聡と管理人さんたちを呼びに言って戻って来た時105の空きコテージニ言ったんじゃないかな？

京子はその105の空きコテージニ居るんじゃないのかな？」

なぜか聡も大森君もニヤニヤしてる

「大森君何か隠してるね」私は凄い形相で大森君に詰め寄った

「まっまっ愛美みんな集めて105のコテージへ行ってみようか」

PM7：15分 全員揃って105へ中に入るとそこには京子の死体では無く 紙を丸めたやつが天井をつたっていて

垂れ幕には「愛美お誕生日おめでとう」の文字 えっ・・・すると京子がソファの影から出てきて「一人で準備するの大変だったんだよマジで」パンパンクラッカーの音が響き渡る「おめでとう愛美」「聡・・・騙したのね皆！」

私は心の中で怒りつつもホッとしていた

「他にもトリック仕掛けてたんだけどな」「・・・あっ！とり皿一つ足りないとか？」「愛美推理小説好きでしょ？」

皆で誕生会をして凄く楽しかった翌日も皆で過ごす かけがえの無い仲間 素敵な夏休みになった 帰りのフェリーの中で「あっ哲夫～」「まて～あはは」バカップルな哲夫と優子「京子そろそろ俺たちも・・・なっ」

京子にちょっかいを出すハンサムな高志「高志君ジュース買ってきたよ！」

相変わらず大森君はジュース買って来いって言われてる愛すべきパシリ「ウザイ！あっち行ってて」

何より本を愛している京子「どうだった、キャンプまた来ような」

そして私の彼氏にしちゃもったいない位の聡

でもふと気になったのは・・・島でアルバイトしている子に出会わなかった事だった・・・  
終

## ゲシュタルト～狂い出した歯車～ミステリー編

---

PM3 : 00

私の名前は愛美

今日から無人島での楽しいキャンプが始まります

皆私の誕生日忘れてるのかな？

でも友人たちと過ごすこの時を大切にしていきたい

「までえ～」 「やめてよもう子供じゃないんだから」

哲夫と優子 中学生の時から付き合ってるみたいで

大学のサークル内でも有名なバカップル

「ねえせっかくのキャンプなのに本読んでるの？」 「うるさいわねえ～あっち行っててよ」

高志と京子 高志は誰にでも優しく気軽に話しかけてくる

女の子にあんなに接近して話しかけてくる男子は今時珍しいね

京子は本が大好きな文学少女って行ったところかな？ 私が推理小説が好きで本好きで意気投合！

ファンタジー小説が好きで時折優しい表情を浮かべながら

いつも本を読んでいる

「みなさ～んジュースいかがですか？」 大森君 みんなのパシリみたいな存在だけど

良く言って弟のような可愛い後輩 そして・・・ 「どうした愛美？なんか浮かない顔だぞ？」

「ん？別に」 私の彼氏の聡 大学に入ってサークルに誘ってきたんだけど 一目惚れで2年になった時勇気を出して告白 付き合うようになってまだ半年 この間初めて彼の部屋でキスした時は人生で一番凄く緊張したよ

このサークル仲間たちと2泊3日で瀬戸内海にある無人島ゲシュタルト島へキャンプをしにやって来た

島は地元の観光協会が管理していて島には管理人夫婦とアルバイトの子一人が居るだけ

今日は完全に私たち貸切です

PM4:30 島に到着すると管理人夫婦さんがお出迎えしてくれた 「ようこそゲシュタルトへ疲れたでしょ～さあ」 私たちは小型バスに乗せられキャンプ場へ そこはコテージが5つあり近くには清流が流れている セミの鳴き声が夏を演出してくれている 「俺はちょっと島を散策して来る」 そう言うと高志は一人で森の中へ消えていった 清流のせせらぎを眺めていると聡が管理人さんから鍵を預かってきた

荷物置こうと部屋割りを言う聡 「僕と優子は同じコテージだね」 「もう何する気なの哲夫♪」  
・・・ 「高志と俺だな」 「ねえ聡と愛美付き合ってるんだから二人で同じコテージにしなよ」 ナイスパス 「そ・・・そうか？どうする愛美？」 「うん・・・聡が良ければ一緒にいいよ」 「じゃ僕は京子と～」 「あんたは高志と！私は一人で良いよその方が静かで本読めるし」

おのおのコテージに行き荷物を置きに行った

「早速飯の準備するか？」 やっぱキャンプの醍醐味って行ったらご飯でしょ 「やべえ肉忘れてきた」 「嘘でしょ！何やってんの哲夫！！」 「うん嘘」 「もう哲夫ったらあ～優子驚いちゃった♪」  
・・・ 「飯の用意は俺たちがするから女子は休んでなよ」 「じゃ私コテージに居るから出来たら呼んで」 「私も手伝うよ」 「ああじゃあカレー頼む」 キャンプといえばカレーである。オーソドックスだが嫌いな人は居ないと思う 「もう飯出来たのか？」 「どうだった高志、島は変わった所あった？」 「神社が一つあっただけだ」 「あれ服が変わってるんだけど」 「汗かいてね～暑い暑い」

PM5 : 15 「よし出来た京子呼んで来てくれ」 「どこだっけ京子のコテージ」 「104だ」

「ありがとう高志君」大森君がさっそうと京子さんのコテージへ「とり皿一つ足りないね」  
「大森のやつに頼んだんだけどあいつ7人居るのに6人分しか用意してないんだ」  
・・・うぎゃあ～??? 「どうした大森！」血相を変えて走ってきた大森が信じられない事を言  
い出した「京子が・・・死んでる！」??? 「何行ってんの？冗談でしょ？」皆でコテー  
ジへ・・・きゃああそこで見た光景はソファで胸にナイフが刺さった状態で血だらけの京子だ  
った「管理人に知らせなきゃ愛美来てくれ」「・・・」「愛美!」「うん」「哲夫達はコテー  
ジで待機しててくれ」「私怖い・・・」「じゃ聡達が戻ってくるまで  
俺たち4人は聡たちのコテージで待ってよう」

どんどんどんすいません!!管理人さん!!「ハイ・・・どうされました?」「京子が・・・仲  
間が死んでるんです!」「ええ!それは大変だ」管理人夫婦をつれ京子のコテージへ戻ってきた  
私たち「んと104ここです」  
そこには先ほど見た凄惨な光景が広がっていた胸をナイフで一突きされ絶命してる京子・・・  
管理人夫婦は何か思いつめた感じだった  
とりあえず一つのコテージに皆集まった

PM7:00「なんで京子が・・・」高志は普段見せない程落ち込んでいた大森君は携帯をいじ  
ってる「大森!こんな時になに携帯いじってたよ」「えっあっごめん」ちらっと見たら何かメ  
ールを見てみたいだった  
「ねえ哲夫私怖い・・・二人だけで一緒にいよ!」「だめだよ皆一緒に居なきゃ」「このコテー  
ジ部屋が3つしかないけど」「じゃあ僕と優子は一緒」「俺は大森と部屋にいる」「  
うん・・・」「じゃあ俺と愛美は一緒の部屋で」

PM7:30皆がそれぞれ部屋に入ったリビングからは全ての部屋が見通せる  
とんとんどこかの部屋をノックする音が聞こえその後ガタンと閉まる音がした  
ガタンどこかの部屋のドアが開いた音がした  
「ねえ聡・・・」「大丈夫、愛美は俺が守る」

とんとん  
誰かが部屋をノックする音が「ああ優子か」「ねえ哲夫知らない?さっきトイレに行くって言っ  
てそれっきり」私たちはリビングに居た高志に話を聞くことにしたが・・・「寝てるよ」  
私たちは大森君の部屋をノックした・・・返事が無い「大森君・・・ねえ?」部屋の鍵は開いて  
いた  
???  
「哲夫?哲夫!!」そこには首からおびただしい血を流し倒れている哲夫が居たまだ息はあった  
「哲夫!誰にやられた!」「あっ・・・あいつ・・・ゴホッ」「もうしゃべるな!すぐに管理人  
呼んで来い!  
高志のやつ起こせ!」「・・・気をつけろ・・・あいつ・・・」「哲夫・・・いやあ～」

PM8:00「すぐ連絡船に来て貰うことにしたよ!警察もだ」「いつになります?」「朝にな  
りそうだ」  
「大森のやつどこ行ったんだ?」「気になる点が・・・アルバイトの子が昼間から見当たらない  
んだ」  
「どんな人なんです?」「正直者で心優しい子じゃよ」  
「ありきたりだ、大抵雇われ主に対してはそう言う態度を取るもんだ」「高志!失礼だろ!」「  
これからどうする?」「部屋に分かれるのは危険だ!リビングで過ごそう」???「それって私

たちの中に犯人が居るって事？」 「いや私もう誰も信用しない！一人で居させて」 そう言うと優子は自分の部屋へ帰り鍵を閉めた 「俺も一人で居るよ・・・なあ聡」「ん？」 「愛美ちゃんを絶対守れよ！」 「ああ」

PM9：00 辺りに静けさが漂う 私は皆でリビングに居る事がベターかと思ったのだが「少し寝ろ」「うん・・・優子の事が心配で・・・私も聡がそんな事になったらって思うと」「俺は傍に居てやるから」「うん」 私達は部屋に入りベッドに横になるとうとうとうとしていた 高志はリビングに残ると言ってソファに横になった 「高志、後で大森探しに行くぞ」「ああ」

・・・・・・・・

どれくらい時間が経ったのだろう 少し眠った私はリビングへ行こうとした

私は頭の中でパズルのピースが徐々にハマって行く事に気づいていた

優子？ 優子の居る部屋のドアが少し開いている事に気がついた ??? 部屋に入ると優子が亡くなっていた

胸に暖炉の火鉢が突き刺さり絶命していた

「まさか・・・聡が？」 傍に居た聡は居なくなっていた

私は部屋に戻り鍵を閉め推理を始めることにした

- ・大森君が京子を呼びに行く時部屋番号を知らなかった事
- ・高志も京子の部屋番号を知らなかった事
- ・哲夫が亡くなった時聡とは一緒に居た
- ・哲夫は大森君の部屋で亡くなっていた
- ・哲夫や優子が亡くなった時高志はリビングに居た

私の中でパズルのピースが当てはまった！！ 聡と連絡取らなきゃ！！このままだと聡が危ない 私は部屋を出てコテージから管理人が住む家へと向かった 外は暴風雨だった、

傘なんて差してられない 生きていて聡

それは初恋だった 恋に無縁だった私が初めて心から許した人だった

どんどん「聡！聡！」 反応が無い「嘘っ・・・いや・・・」

ガチャ 管理人さんの家では聡が管理人夫婦を探していた「管理人さん！・・・愛美？」

京子・・・哲夫・・・優子・・・大森君・・・管理人さん夫婦・・・「高志はどこ？」 「どこって大森のやつ探してるよ

とりあえず入れよ」 そう聡に招き入れられ暖炉のあるリビングで聡から差し出された

毛布に身を包み高志を待っていた

「ねえ聡・・・優子が・・・」「何かあったのか？」 「殺されてる・・・信じて！私じゃない！」 「当たり前だ！

愛美はそんな事する子じゃ無い！」 「管理人さん達は？」 「この家に居ない・・・どこ探しても見当たらない」

「あと地下室だけだけど外から鍵がかかっている」

どんどん「高志のやつ戻ってきたぞ！」 「聡？愛美？大丈夫か？優子は？」 私はこの男だけは許せなかった

私は聡と二人きりになりたくって一芝居売った 「聡・・・私怖い・・・聡と一緒にいたい！犯人探しは警察に任せて」「そうだな、聡！愛美と一緒に居てやれ」「ああじゃコテージに戻ってる」「俺は警察が来るのここで待ってる」

「一人で平気か？高志」「・・・慣れてる」

私と聡はコテージに戻り部屋に鍵をかけ私の推理を聞かせた 「ねえ聡、犯人は大森君じゃ無いよ！」

「じゃ誰なんだ？」 「バイトの子も恐らくもう・・・死んでる」「犯人は・・・高志だよ」

「えっ」

「まずね 島に到着して島を散策して来るって行った高志でしょ その時アルバイトの女の子も島を散策してる途中で まあ口説いたんだけど断られ殺されたって感じかな？ 高志がコテージに戻る際京子がコテージに帰ったよね」「確か服が汗で汚れたからって入れ替えで高志が皆の所に来たな」「汚れたのは汗ではなく血だよきっと」「それに大森君京子のコテージどこか知らなかったよね」「ああ来て早速水着に着替えて泳いでたからな、部屋番号知らないね」「それ教えたの高志だよな？」「あっあいつもすぐ散策に出かけて京子の部屋番号知らないはずだ！！」

「でも大森君に104って即答してたよね」

「ねえ高志のコテージに行ってみない？」「とりあえずこのコテージのどこかに血のついた服が」  
がさがさがさ

「ねえ！聡！こっち！」

洗面所は血だらけでゴミ箱には血のついたシャツが捨ててあった「愛美の推理当たってたな」

「ここにいと危険だよ」

ガタ

「誰だ？」

ガチャ

「高志・・・」 「どうした？もう朝だ！荷物取りに来たよってか何で俺のコテージに」 私は洗面所の事や自分の推理を高志に話した「・・・そうか・・・」 「これ説明してくれる」 私は血がべったりとついたシャツを手渡した

「あの子が悪いんだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 「良い島だね」「うん私も最初遊びに来てて気に入っちゃって」

「その時しっとりとした髪に濡れたシャツに・・・魔が差した」「いや～やめて放して！こっここないで」

「その時彼女がサバイバルナイフ持っててさもみ合っただけにやっちゃった そのシャツの血の一部は彼女の返り血だ」「コテージに帰る時京子にたまたま見られて」「忠志・・・何その血・・・どうしたの怪我したの・・・ってか何そのナイフ」「京子の体にナイフを残していたのが間違いだった」「あのナイフ私たち夫婦があの子にあげた物だ！お前たちの中に犯人がいるだろ 警察に調べて貰えれば分かる」「そう言われてカッとなって」

「でも残念だ、警察が来る前に俺はこの島から出る。管理人から聞いたが一隻小型の船があるようだ」

私は持っているICレコーダを見せた「全部これに収めたからね！自首しよ忠志」「嫌だ・・・じゃあ」「待てよ高志」「行かないで聡」「愛美ちゃんはお前が守ってやれ」高志はコテージから出て行く前「大森は神社の境内にいるよ！もっとも死んでるけどねあはは」「高志お前・・・」「大森を犯人に仕立て上げようとした、彼女の携帯から大森にメールして 神社で待ってるてな」

(初めまして早紀って言います、この島でバイトしてます ふとお目にかかってもっと仲良くなりたいなって 良かったら後で神社に来てください)

「ねえ早紀ちゃん～どこ～」 「やぁ大森」「えっなんで高志が！うわあ～」

「優子は？」 「聡が大森が犯人だと踏んで管理人の所へ行くって言った 後に殺した・・・ 愛美は部屋の鍵をかけてたからな・・・元々愛美か聡 どちらも犯人に仕立て上げることも可能だった」

「酷い・・・」

高志がコテージから出て行き 私はすぐ警察に連絡して全てを話した

私達は神社へと足を運んだ 雨脚が強くなってきた

ドーン

雷も鳴る中、懐中電灯頼りに暗い夜道を歩くでも不思議と心は平穩その物だった 聡が居てくれる・・・

それだけでこの恐怖も克服できた

神社に着くと真っ先に出迎えたのは狐の置物 駒狐とでも言うのか その先の境内へと足を運ぶガラガラガラ ピカッ 雷光が境内の中を一瞬映した時横たわっている人影が見えた 「大森君？」 懐中電灯で辺りを見渡す 埃の臭いの中・・・ 「大森君！！」 すでに絶命していた ナイフで一突き二突き何もここまでしなくても・・・

「愛美！俺から離れるな！絶対に！」 「うん」

私達は徒歩で船着場まで来た しかし小型船はエンジンが外されていていた 「高志のやつまだ島に居るのか？」

船着場の小屋で朝になるのを待った

AM6：15

ブォーン

私は知らない間に眠っていたようだ でも聡は起きていたらしく 私の傍にずっと居てくれた 刑事さんらしき人たちが現れた 「どうも警視庁のの明智です、詳しく聞かせてくれるかな 君達はこの島を徹底的に調べてくれ」

「はい」

私達は警察に事情を聞かれた あのICレコーダも警察に渡した

警察は高志を捜索 滝の所で早紀さんの遺体の横で何か恐怖に怯えた表情で絶命している 高志を発見

管理人さん夫婦は家の地下室で殺されていた

AM9：15 ブォーン 私達は帰りの船に乗った 海鳥達が船を取り囲みまるで何事も無かった様な感じだった 「聡・・・」 「愛美・・・俺は何があってもお前を守る！約束する！」 「うん」 あの悪夢を私達は決して忘れない

終

## ゲシュタルト～狂い出した歯車～宝探し編～

---

「なあ知ってるか？この島には財宝が眠ってるらしい」

大学のサークル仲間で2泊3日のキャンプに訪れている

夕食の準備の最中高志がこう言って来た

「管理人さんから聞いたけど昔徳川幕府の船が海賊に襲われて」

「徳川の財宝がこの島に・・・」

「なあ明日島の裏側探さねえ、これ見てくれ」

「何これ？」「管理人さんから貰ったゲシュタルト島の地図」

「例のトレジャーハンティング企画のやつ？参加するの？」

「この島の地図、形状から言ってここが怪しい」

「どうしてそう思うの？」「見てみる唯一くぼんでるだろ？」

船から財宝をだして奥の洞窟に・・・」

「ねえやめとこうよバチが当たったら怖いよ」

「優子は臆病だな～そこが可愛い」「う～んもう哲夫さんたらあ～」

・・・「愛美はどう思う？」「あると思うってかロマンチックだよな？」

「無いわよそんな物」「京子は現実主義者だからな～」

翌日私達は島の裏側へ探検に出かけた うっそうと生い茂ったジャングルを  
抜け清流を渡りようやくその入り江へ

「ほらあそこに入り口が 足場は確保されていないが確かに入り江の奥には  
洞窟らしき穴が「他にどっか入れる場所無いかな」

探していると入り江の奥の林から何やら怪しげな穴を発見

「ここから入れそうよ」「お前先に行け」「嫌だよう」「ほら」

高志は大森のケツを蹴飛ばした「うわあ～」

まるで滑り台を滑ってるかのように大森が奥へと吸い込まれ声が遠くなっていく」

「俺たちも行くぞ」「わあ～」「きゃあ～」 私たちも続け様に穴から滑り落ちて行った  
ドン

「痛ったあ～い」

懐中電灯で辺りを見渡すと3つに分かれた洞窟がある

「俺と京子は左、哲夫と優子は右、聡と愛美は真ん中に」

「僕は」「大森はここで待機しろ」

.....

「何も無かった・・・」「私の所なんて虫がうじゃうじゃ」

「あれ？大森は」懐中電灯で辺りをくまなく調べる「もう一つ道があるぞ」

その先には・・・金銀財宝を目ににやけている大森が「これは僕のものだ！！」

「どけ」大森を払いのけた高志は財宝を調べた「これは偽物だ」

「え～本物っぽいよ」「ほらトレジャーハンティングの

チラシ入ってたろアレのおもちゃの宝じゃ無い？」

僕たちはキャンプ場へ戻り帰りのフェリーを待っていた

するとそこへ管理人夫婦がやって来た「宝は見つかりましたか？」

「ええ入り江のちょっと入った林の穴から」「えっ？」

「でもいらないですよおもちゃの宝物なんて」

僕たちが東京に戻り数日後 新聞に大きな見出しで

「ゲシュタルト島で徳川財宝見つかるの文字が」

「うわあ～本物だったんだ」「高志お前え～」

「まっまあいいじゃないかな」「許さないぞお～あつ逃げたまてえ～」  
こうしてひと夏の冒険は終わった・・・

終

## ゲシュタルト～狂い出した歯車～恐怖編

---

このゲシュタルト～狂い出した歯車の世界のキャラクターの諸君

哲夫「何だ？今の声？」

京子「ん？どっかで聞いた事のある声」

聡「あっこのゲシュタルト～狂い出した歯車の著者！夜美神威だ！」

その通り！ピンポン！はぁ～いどなたですかぁ～っておい

高志「一人でポケて一人でツッコんでる・・・」

君たちは私の意のままに操れるのだよ

愛美「例えば？」

愛美「私実は痔なんです」

皆「ええ～」

愛美「えっ私そんな事言ってないなんてことないじゃなぁ～いって

愛美「やめて！」

京子「どうしよう・・・夜美神威きつとカット」

皆「それはマズイ」

優子「えっあれ美味しいよ？」

君たちにとっておきに物を用意してある

聡「とっておきにじゃなくとっておきでしょ？」

皆（大爆笑）

貴様ら～もう許さん

京子「私レズなの」

鉄雄「俺は哲夫だよ」

愛美「さぁ皆私で朝まで生テ○ビ」

聡「愛美・・・俺は司会の古館○郎だから駅で待ってる」

優子「秋元さぁ～ん今度の総選挙いつものね♪」

高志「愛ちゃんやっぱ君にはあいつしかいないんだよ」

ともあれ私たちは夜美神威の怒りを鎮めるため付き合うことになった

精魂尽き果てるまで・・・

大森「ちょっとまって僕の事忘れてるとほほ」

## ゲシュタルト～狂い出した歯車～ちょっぴりHなゲシュタルト編

---

高志「愛美これこの間の」

愛美「3万円だよありがとう」

大森「あれするのいくらだっけ♪」

愛美「大森君は4万円」

京子「私もして欲しいな～」

愛美「順番順番！」

愛美「これで皆からのカンパで聡へのプレゼントが買える～」

終

## タイトルバック～啓蒙犯罪～

---

タイトル啓蒙犯罪のショート・ショートです

世の中の犯罪が啓発の為の犯行

「啓蒙犯罪」だったとしたら・・・

## 啓蒙犯罪

---

三億円事件（さんおくえんじけん）は、東京都府中市で1968年12月10日に発生した、窃盗事件である。三億円強奪事件ともいわれる。1975年（昭和50年）12月10日に公訴時効が成立し未解決事件となった。

桶川ストーカー殺人事件（おけがわストーカーさつじんじけん）とは、1999年（平成11年）10月26日に埼玉県桶川市の東日本旅客鉄道（JR東日本）高崎線桶川駅前で、女子大生（A当時21歳）が元交際相手（B当時27歳）とその兄（C当時32歳）が雇った男（D当時34歳）によって殺害された事件。この事件がきっかけとなって、「ストーカー規制法」が制定された。

地下鉄サリン事件（ちかてつサリンじけん）とは、1995年（平成7年）3月20日に、東京都の帝都高速度交通営団で、宗教団体のオウム真理教が起こした神経ガスのサリンを使用した同時多発テロ事件で、死者を含む多数の被害者を出した。警察庁による正式名称は地下鉄駅構内毒物使用多数殺人事件である。この事件は日本だけでなく、世界にも大きな衝撃を与えた。

~~~~~

「記者会見を開きたいと思います。指名された方は所属を示して質問して下さい」

「スポーツ東京です！あなた方は何故このような犯罪に手を染めたのですか？」  
「夕日新聞です！最初は軽犯罪からテロに至るまでどのような経緯が」

マスコミの追及に逢うが我々は何も言わないはずだった

「ねえ～君 ちょっと今仕事ある？」  
そんな誘いから始まった今回の国家を揺るがす事件

国会図書館にある膨大な事件・事故の新聞資料なんかはそのほとんどが

「啓蒙犯罪」

いわゆる国家が仕組んだ事件だった  
霞が関にあるとあるビルに行く  
とある部屋に通されるとすでに十数人の人たちが集められていた  
中学生くらいの素朴な少年・茶髪のいまどき女子高生から  
容姿端麗な大学生風のお姉さんに・いかついヤンキー風のお兄さん  
さらにいかついヤクザみたいな人やどこにでもいそうな主婦や普通のスーツ姿のサラリーマン？  
驚いたのは幼稚園児？幼い青いかっぱう着姿の幼児まで  
突然ベルが鳴ると共に5人のスーツ姿の人が入ってきた  
役人らしきその人たちは信じられない言葉を発した

「あの～君たちにはこれから犯罪を行って貰います」

えっ・・・？

「何だって？もういっぺん言ってみろや」  
やくざ風の人が役人風の人たちに食って掛かった  
「いわゆる啓発の為犯罪を行って貰いたいです。法律を作るためには  
まず実例が無いと・・・」  
とりあえず僕たちは話を聞く事にした  
「あの～君、女性だよな？売春をしてみらいたい」  
「僕、男ですけど・・・」  
「ああごめんやっぱ君」  
茶髪の女子高生風の女性に問いかけた  
「あの～私もお男なんですけど」  
明らかに女の声でその女子高生風の人へ答えた  
「世の中に援助交際が蔓延してるよね  
そこで実際援助交際をしてもらって君を逮捕してメディアでさらし者にします」  
「お金でHするなんて最低！！身なりだけで決めつけないでください」  
「だからこそやって欲しいの！私の言ってる意味分かる？」  
「はあ」  
「君は放火をしてみらいたい」  
「ほうかって重罪じゃないんですか？」  
「だからこそやって欲しいの！そして君をさらし者にする」  
「はい」  
「君は通貨偽造、君達は集団強姦ね、ああ女性はプロを雇う  
そして君は証券取引で脱法行為を行って貰いたい」

僕の前に座ってるご年配の先輩らしき人に話しかけられた  
「わしも昔本屋で本を立ち読みして店員は見て見ぬふりの時代だった  
本を盗んでも貧しい時代だからって許された  
それを店主と警察と共同で窃盗これを（万引き）と名付けて  
罪にしたもんじゃ」  
「新たに法律を作るため犯罪抑止のための啓発する犯行、これを  
「啓蒙犯罪！そう言う」

「国会のとある部屋に集められた俺たちはこんな話を聞かされた  
もし書店の立ち読みと言う事を国民が知らなければ本はあっさり盗まれたら  
万引きと言う言葉を作らなければ軽微な窃盗が重罪になってたら  
ストーカー事件を国が用意しないとストーカー規制法が出来ず  
宗教テロが起きないと宗教が誤った方向に行くと危険だと言う事を伝えられない」

「これらの事を彼らはやってきたのです  
罪はあれど罰はありません。総理大臣より恩赦がかけられます」

「しかしそれらはマスコミが啓蒙すれば良かったのでは？」  
「したよ、当然マスコミも一体となってね！まあ君たちは新しいメンバーだから」  
「今後どのような啓蒙犯罪を？」  
「国家転覆だよ、テロリストがメディア使って行う」  
「差し詰めテレビ局・ラジオ局・新聞メディアにハニートラップしかけて」

「もしくは理想に共鳴させてってシナリオで行こうと思う」

「大丈夫なんですか？」

「いや危険なんだこれ慎重に行わないと某国では本当に国家が転覆したからね」

Thanks for WIKIPEDIA

## イファマール追憶記Lite

---

惑星マルスで語り継がれる永遠（とわ）の記録・・・

ナルとミラ 二人の女性の成長物語

yami a long story

夜美神威ファンタジー超大作「イファマール追憶記」

簡易Lite版ですが大方のストーリーが楽しめる全13章収録

## 序章～始まりの刻～

---

かつて世界には6つのエレメントから構成されていた  
火・水・風・土・光・そして闇  
それら6つで構成されるエレメントで世界の均衡は守られ  
厳しい戒律の元  
人々は恒久的な平和で豊かな生活を営んでいた  
しかしその均衡を破壊する者達が現れた  
彼らはラ・リーベルテと自らを呼称し  
世界にFREEDOMを実現すべく  
エレメントを6つのクリスタルに分け世界中に飛散させた  
人々は古代神イファマール神を信仰し  
急速な近代化によって物質文明を築き上げた  
機械文明の幕開けである

現在世界を構成するのは  
大陸の中央に位置し火のクリスタルを司る機械国家ヴィマロ帝国  
大陸の東に位置し風のクリスタルを司る近代国家イニシア皇国  
大陸北東部に位置し土のクリスタルを司る農業大国ヒラール国  
大陸から離れ南に位置し水のクリスタルを司る海洋国家レヴィアタン共和国  
大陸の西部に位置し光のクリスタルを司る観光国家Licht zu beleuchten公国  
世界の果てと言われる闇のクリスタルを司る超強権国家ナチナオール帝国  
そしてクリスタルを保持しない宗教国家イスカリオテ宗国  
多種多様な人種・価値観・宗教観が存在し  
様々な特色を持つ国家群の山積する問題など  
世界は再び混沌とした時代へと突入する  
イファマールの歴史をひも解くと膨大な時間を必要とする  
ここではイファマールに伝わる歴史の一部をお届けしたい

「おはようございます。本日はイニシア全土に心地良い  
風が吹き抜け快晴、午後からは所によりにわか雨が  
降る可能性があるので折りたたみ傘をお忘れなく  
続いては国内ニュースです。  
昨日未明ゼフュロス寺院にて仏像が何者かによって  
傷つけられている可能性があるとしてイニシア文化庁が  
調査に乗り出しました、寺院の僧侶の一人が  
ご神体を清掃中に発見した物で地元警察によると  
夜間の出入りは不可能との見方から内部の者による  
悪質ないたずらとみて捜査しています。続きまして  
昨日年内で休業を発表したイニシアの歌姫のアミ  
アルバム（FREEDOM）がヒットチャート1位を獲得  
その中から  
（夜明け）をお届けします。・・・」  
「おはようございます。ナル親皇陛下様、朝ですよお～」  
「ん・・・ん？それなあに？」  
「おはようございます。今日は良い天気ですですよ 風も心地良いです。」  
「眩しい・・・ん～おはようニーナ」  
「朝食の準備が整っておりますので身支度が出来次第 食堂の方へおいで下さい」  
「本当ね、今日は良い天気」  
「相変わらず固いパンね・・・」  
「お母様、イニシアで一番柔らかいパンなんですよ」  
「ナル、ヴィマロ帝国のミラ皇帝の即位10周年記念式典には  
私は出席しないからナルだけ出席しなさい」  
「お母様は嫌いなんだ・・・あの国・・・」  
「セシル隊長、親衛隊の準備は全て整いました」  
「先遣隊はすでにヴィマロへ出発した。予定では  
親皇陛下は明後日の朝、ご出発される・・・ヤンはどうした」

「すいません～遅れました」  
「朝礼に送れるのだからさぞ正当な理由がきつとある」  
「叔母が亡くなりまして・・・」  
「お前・・・身内を何人殺せば気が済む・・・」  
イニシア皇国は農業・工業・商業のバランスのとれた国家  
町には国民のお腹を満たす様々な食材や  
人々の生活をサポートする便利な機械類が溢れ  
100年間戦争も無く人々は平和に暮らしていた  
一般的に働き者と言われるイニシア国民は  
第2次イファマール大戦以降  
自国の文化・経済を守るため鎖国政策が100年続き  
その間独自の科学技術力を育てていた  
「陛下？陛下～またです・・・」  
皇都テクノシティ 近代的な建物が並び均等の取れた街並みは  
未だかつてない活気に満ちあふれていた  
イニシアの思想家Lが提唱したLスパイラル経済によって  
空前の好景気に見舞われ国民はいつまでも  
この好景気が続くと信じている  
携帯電話ショップにナルはいた  
「新しい携帯電話見せて下さい」  
「こちらが最新式の携帯になります。  
ALLinONEで防塵・防水で内側・外側カメラに  
基本機能のメールに電話・ネット・新しくテレビが観られる機能も追加されてます」  
「この携帯ヴィマロでも使える？」  
「衛星回線を使えば通話・メール・ネットはご利用可能です。  
テレビは無理ですが・・・衛星回線のご契約なさいますか？」  
「おいくらですか？」 「新たに衛星回線ご利用で2500ガル  
現在の通話・通信定額 プランと併用で割引が適用され合計で6980ガルになります」  
「陛下・・・お母様に怒られますよ？」 「いいの」  
「陛下・・・」 「ちょっと携帯ショップへ行ってきました。これ最新携帯だよ！CM見て  
前から欲しいって思った。テレビ機能知ってる？携帯でどこでも テレビが見られるだって」  
「明日の予定についてご報告申し上げます、朝8時にイニシアを出発  
10時にヴィマロに到着予定、11時より皇居にて歓迎式典のち  
ミラ皇帝主催の昼食会にご参加され1時30分より  
ミラ皇帝即位10周年記念式典が始まり・・・」  
「ミラって人とお話出来る機会ありますか？」  
「ナル・・・相手は我が国をマルスの田舎と称してる、相手にはされん」  
「ヴィマロかぁ～帝国って言う位だから凄いだろうね」  
「たいしたことは無いかつてかの国から機械文明を学んだのだが  
今や我が国の方がそれを凌駕している、行ってみると分かる」

ナルとミラ この二人の出会いが後に起こる厄災から世界を救う事になるのだが

まだ運命の歯車は回ったばかり

ヴィマロへの出発の朝  
イニシア皇国ではヴィマロ帝国の情報が開示され  
国民の間では議論が活発に行われた  
「帝国主義の国だからいずれイニシアも狙われる」  
「ヴィマロ帝国は白人至上主義者の国で黒人は皆奴隷らしいぞ・・・」  
「経済ではヴィマロの方が上で我が国より豊かな国らしい」

その頃皇居は慌ただしかった

「陛下！？まただ・・・」

「ミラは何が欲しいかしら・・・最新の携帯電話？  
ゲーム機かな？」  
「ロボットの犬なんていかがですか？」

「それ良いね？頂きっ」  
早速ペットショップへ  
「すいません、ワンロボいます？」  
「はい？陛下・・・ですか？はっはい！こちらです」  
「最近のワンロボはとても高性能です  
最新の人工知能搭載で本物の犬そっくりの行動を取ります  
現在ではプログラムですが感情まで体现され  
なにより人間の言葉を理解する所が人気がありますね」  
「ミラはどの犬種が欲しいだろう・・・帝国主義者・・・  
ドーベルマンかな？でもきっと飼っていると思うから」  
「ゴールデンレトリバーのワンロボ下さい。サイズは成犬で」  
「こちらがGRのワンロボ、サイズは成犬になります。お値段は  
28万8000ガルになります陛下でしたら3万8000ガルお値引き致します」  
「ありがとうございます。ミラきっと喜ぶね」

皇居では陛下の帰りを待つと共に  
ヴィマロ帝国ミラ即位10周年記念式典での準備が着実に進められていた  
「ただいま」  
「相変わらずねナル・・・その犬は？・・・目がグリーンって事はロボットか」  
「うん、ミラにプレゼントしようと思って、喜んでくれるかな？」  
「それは面白い、ぜひ連れて行きなさい」  
「最終調整に入る、陛下がお招きを受けたのは隣国ヴィマロ帝国  
100年前第2次イファマール大戦の時敵対国であり  
現在では我が国は鎖国政策を取るにあたり交易は限られたものである  
今回が実質我が国の国際社会への復帰にあたる。  
現在議会では鎖国政策解除に向けあらゆる法案を審議している  
結果次第では我が国の政局まで左右される事態になりかねない  
気を引き締めて各自行動とるように」

出発まであと1時間あると知ったナル  
1通の手紙をしたためた

皇居にて記者会見  
「陛下、ヴィマロ帝国についてどのようなご考察をなされているのですか？」  
「ヴィマロ帝国は社会・経済は成熟して我が国同様豊かな国家ですね  
ただし我が国は一貫してヴィマロの黒人に対する奴隷政策に反対の意向を示し  
一刻も早く黒人奴隷政策を見直して頂きたく思います」  
「では行って参ります」  
こうしてナル達はヴィマロへと向かった

ヴィマロへ向かう途中一人の旅人に会った  
「これ　ここはヴィマロ帝国イニシア皇国へと続く  
ベアクアップ・ヴァッサア街道、イニシアへなら現在外国人の入国は禁止  
されている。どこへ向かう」  
「あなた方は・・・」  
「イニシアの政府関係の者だが？」  
「お助け下さい・・・寺院・・・Feuerstein寺院で見たんです！」  
「何を？」  
「今世界的に話題になっている仏像が破壊してる連中です、  
ラ・リーベル・・・」  
「おい」  
男は息絶えた何か大切な事を伝えようとして  
男の遺体はヴィマロ側へと引き渡す事になった

ヴィマロ帝国  
「現在各国首脳が我がヴィマロへと続々到着している  
イニシアに関しては論外だ！約束の時間になっても来ない」  
「100年前イファマール大戦時我が国はイニシア皇国と敵対関係にあり

「違う！！共に破壊者から神によって託されたこの惑星マルスを守ったのだよ。」

.....  
.  
「時間だ始めるぞ」

ドォーン

「でもお私アイドルだから恋愛禁止なんですよねっ、だからこれからも歌にお芝居に頑張っ  
番組の途中ですが特別放送番組をお送りします。先ほどFeuerstein  
寺院に置きまして寺院の駐車場に停めてあった車が  
爆発する騒ぎがありま・・・」 「たった今入って来た情報です！  
死傷者の中に子供が含まれる模様」

「現地と繋がります。〇〇さん。はい、警察関係者によりますと  
死者2名負傷者14名 死者は成人男性と成人女性で身元は現在  
所持していたとされるIDから調べている所です。」

「負傷者の中に子供が含まれていますが命に別条は無いとの事です」

続く

## 第1章～出会い～

---

「テロだと」

「はい、Feuerstein寺院におきまして爆破  
事件が発生、現在調査中ですが

こんな物が総務省に届いております」

（我々は全ての厄災を防ぐため  
6つのクリスタルを再び一つにする  
我々の行為は善であり  
何人たりともこれら計画を邪魔する者は  
神の力を借り抹殺する）

「先ほどヴィマロに到着したイニシア団から  
ベアクアップ・ヴァッサア街道で倒れた男が  
最後にラ・リーベルテの名を」

「その男は世界中の寺院の仏像を破壊している連中と対峙しています  
引き続き関連性も含めて調査します」

「凄い！街全体が機械みたい」  
ここがヴィマロの帝都ローエンです

世界でもっとも大きな都市として知られてます

街の様相はまるで人と機械の融合  
建物は鉄骨むき出しの古き良き機械的建物が多く  
経済も世界1位を誇り地下資源も豊富です

技術力もイニシアに劣りませんが最先端の技術を様し  
家電ヴィマロ製品は世界中で信頼されてます

しかし街の中心部から離れた場所にスラム街が存在し  
貧富の格差が広がりつつあります

また黒人は差別され強制労働に従事してます

「お集まりの皆さん  
我が女帝ミラの即位10周年にご参加頂き誠にありがとうございます」

「報道でお知りの方も居られると思いますがFeuerstein寺院において  
痛ましい爆破事件が発生しました。現在鋭意調査中です」

「ではミラ女帝のご登場です」  
おおお  
ブロンドの白人の女性で世界で最も美しいと言われるミラ様  
「亡くなられたお母様にそっくり」

「凄いドレスね、あの王冠もいくらするのかしら」

「まだ若いのにしっかりしてますね」  
「お集まりの皆さん、私事で遠方からはるばるこのヴィマロへ

ご足労頂きありがとうございます、こちらからご挨拶に伺わせて頂きます」

「ミラ」

「お父様」

「イニシアにはあいさつ無用無視しろ」

「あっこっちに来た！初めましてイニシ・・・」  
「ごきげんようヒラールからようこそ大統領」

「初めましてお目に書かれて光栄です」

「私の所には来なかった・・・」

「まったく失礼なお方だ・・・帰るぞ」

「ミラ様に贈り物をされたい方はこちらへ」

「あのこれ・・・」

「動物はお預かり出来ません」

「これロボットなんですけど・・・ほら」

「お腹の所に電池がありまして  
メンテナンスは首をこうやって外して」

手紙も添えましたのでぜひ」

「わっわかりました」

「ミラ様本日のプレゼントです」

「興味無い」

「これなんかどうでしょう」

「犬ではないか」

「これロボットなんです」

「本当か？本物そっくりだぞ」

「なっどこの国だ」

「イニシアです。添えられて来た手紙です」

(親愛なるミラ女帝陛下様

お話ができる事を楽しみにしています

プレゼントのロボット犬いかがですか？

餌や糞尿がないけど本物そっくりのロボット「ワンロボ」

今度我がイニシアへ遊びに来られませんか？

いつでもお待ちしております)

「やっぱり家が落ち着くね」

「しかし挨拶が無いなど我々に対する態度が酷すぎる」

「外務省を通じ正式に抗議すべき事案かと」

「ミラ受け取ってくれたかなプレゼント」

「イニシアか面白い、行ってみる価値はありそうだ」

## 第2章～帝国の闇

---

6年前ヴィマロ帝国 ミラ10歳 帝都ローエンにて  
「ミラ皇職に着くには帝王学だけではならんのだよ  
例えば他者を脅迫する方法や屈服させる横暴さなど私から学べ」

「ハイ！お父様！」

「ああ偉大なるシン皇帝陛下様お恵みを」

「邪魔だ貴様」  
ダン！ 浮浪者を蹴飛ばすシン皇帝

「ミラもやってみろ」

「ハイ」

「ミラ様・・・」

「このやろう！」

バシ！浮浪者の顔を蹴るミラ

「非生産的な人間などこの国には必要無い。容赦せず迫害しろミラ」

「ハイ！」

帝都ローエンから路地に入るとそこは最下級の人々が暮らすスラム街die Armen Zone  
「匂いが凄いです」

「皇帝陛下及び皇太子さまのお通りだ！頭を下げろ！」  
die Armen Zone の人々は頭を下げる  
「ねえお母さんりんご買って！ねえ買って！」

「しかたないわねえ・・・」

「すみません3ボンしかないのですが・・・」

「じゃあちょっと腐ってるけどこれで良い」

「やったあ～りんごだあ～」

「あっ陛下と皇太子様！頭を下げなさいケン」

「ミラ様！」

「ちょっとケン！！」

「何事！」

「これりんごなんですけど、食べますか？」

「こんな腐ったりりんごなんか食べられるか！」

バシ・・・ミラはケンの手を払いのけ落ちて転がったりんごは水たまりへ

「申し訳ありません！さあケン！」

「りんご・・・僕食べられますハハッ・・・うう」

ケン親子は涙をこらえその場を去った

「ミラこの先が強制就労所だ、世界で最も醜い肌の色を持つ者達が働いている所だ」

Blackpeople第一強制就労所

「ミラみろやつらの肌の色・・・真っ黒だ」

「うん！」

「さあ働け！ビシッ」

「痛てえなあ俺何もしてないだろまったく・・・」

「黙れ！ビシッ！」

「黒人ってだけでなんでこんな目に」

.....

現在

「ミラ様！お父様のご病状が！」

シン前皇帝は病に伏していた

「お父様・・・私イニシアに行ってみようかと」

「そうか・・・私はこのざまだ・・・」

「私は悪政を行なってきた・・・」

「何か・・・何か学べるものがあるかと」

「行って来ると良い・・・ゴホォ」

「ジーナ、イニシアに私が行く事を伝えてくれないかそしてこれ」

「なんです？」

「先日の式典の無礼の詫状だ」

「こちらは帝国ラジオ放送です。先日Feuerstein寺院で起こった爆破事件について政府はテロと認定しました。現在世界各地で宗教施設を狙った事件に関連している可能性があるとして各国の捜査機関と協力して事件の全容解明に努めて行くとの公式見解が出されました。続いては経済トピックスです。現在我が国の経済成長率は芳しく無く隣国のイニシアが鎖国解除し国際社会との経済格差を是正すれば我が国の経済も再び高揚するとのアナリストの発言が政府広報より発表されています。我が国とイニシアは・・・」

「ナルか・・・」

「ワン！ワン！」

「犬までロボットにしてしまうとは・・・イニシア・・・」

続く・・・

作者注釈

文章に一部差別的な要素が含まれていますが

作品の構成上必要と判断し載せています

心痛めた方もおられると思いますが

ミラガナルに出会い「何か」を学ぶ事で

ヴィマロ帝国の黒人差別も格差も是正されて行きます

あくまでフィクションとして物語として捉えて下さい

ご容赦下さいね

### 第3章～動き出した歯車～

---

「首相、ヴィマロから連絡が」

「公式にイニシアを訪問したいとの意向が伝えられた  
我が国とヴィマロはかつて第二次マルス大戦の頃は  
盟国として共に戦ったがヴィマロが隣接してる  
黒人国家への侵略を食い止めるための  
10年前ネグロ戦役で交え  
国交は最悪の状態にある。我が方としては  
多種郡に渡る黒人国家の開放と黒人の奴隷解放  
これら無くして国交は無いと言いつけて来た  
今回の訪問はミラ皇帝の非公式訪問という形を取り  
我が国の主言が変わっていない事を国内外に示す事  
これが必要である」

6日後

「間もなくですミラ様」

「これがイニシア・・・」

ミラが見たイニシアは自国とは違う独自の文明を  
築き上げて来たイニシアの姿を模した建造物

特にその高さの驚いた  
この地方は地震が多いと聞いていたが

建物の高さはイニシアの耐震加工技術は  
優れている事を暗に示していた

皇居へと招かれたミラ

「ナル・・・」

「ミラ陛下！お久しぶり！」

先の無礼など気にも留めない純真無垢なナル

「あっああナル覚えている」

このマルスの運命を変える事になる運命の出会い

.....

「そうなんだ！ナルに提案がある、あのロボット犬」

「ワンロボ」

「そうワンロボあれ餌を食べられるようにしたらどうだ

本物みたいで面白い」

「なるほどお～便は？」

「普通にシーツの上にするように・・・餌も匂いが臭く

無い方が良い」

このナル・ミラ特許合戦はなかなかの見物ですよ

「これ携帯」

「なんだそれ？ラジオ・・・か？」

「ううん電話」

「えっ電話？」

「これねえ～ミラ陛下の携帯電話」

2日前

皇居科学技術部

「博士～」

「なんじゃ～ナルか？」

「お願いがあるんだけど」

「この前の

「それじゃ無くてヴィマロでも使える携帯電話」

「ヴィマロはU1無線電波を使っておるのうイニシアはU3だ」

「でこんな感じの携帯電話」

「2日で作ってね～じゃ」

「じゃじゃあって2日で？相変わらず無理ばかり言いおるのう」

「す、凄いこの電話」

「電話番号も登録出来てメールも出来て

ヴィマロでも使えますよ」

「ヴィマロ皇旗のデザインがカッコ良いな」

「気に行ってくれると思った」

「この四角いのは？」

「アプリって言うの！フォースって言うアプリDLしといた

マルスではよく遊ばれてるゲームだよな

これで暇な時遊べるよ」

「なあナル・・・ファースのアプリを通信で対戦って出来ないか？」

「えっなにそれ！凄いミラ！特許取らなきゃ！」

「いや特許はナルが取れば良い」

「ダメだよ」

「通信で対戦なら遠く離れてても一緒にプレイ出来る」

「この携帯電話なる設計図はいくらで売ってくれる？」

「そう来ると思って話は進めてあるから  
私の国の製品を輸入したうえで首相と話し合っ」

「ねえ明日は街へ行かない？首都のオキトの中心街から

ちょっと脇に入った私のお気に入りのストリート」

「良いのか？街に出て？」

「私は平気だよ～ミラは知られて無いし」

ナルに出会いミラの心の楔は一つづつはがれて行く

感じがしていた。

この出会いがヴィマロの辿る運命を変える事になるとは

この続きはまた次のお話で

## 第4章～光～

---

翌日・・・

「おはようございますミラ陛下」

「おはよう・・・昨晚はずっとフォースやってた

しかし凄いなイニシアの携帯電話なる物は・・・」

「おはようミラ」

「ああナル」

「準備出来たみたいだね～出発」

首都オキト中心街

「凄いなあ～こんな高い建物は見た事が無い」

「ここから脇に入るよお～」

「なんか良い匂いがする」

「クレープって食べた事ある？」

「無いなあ・・・美味しいのか？」

「ハイ」

「うん！美味しい～いちごだよね」

「ここは若い人たちがずいぶん多いね」

「ナル様」

「あ〜ジニ、またこんな所で物乞いやって

戦兵年金はどうしたの？」

「博打で取られちゃいまして・・・この有様です」

「ギャンブルは法律で禁止されてるでしょうが・・・」

「ナル・・・この物乞いと知り合いなのか？」

「ミラ・・・先のネグロ戦役で兵士として戦い

指見てごらん・・・右手親指以外無いでしょ」

「戦役兵障害者年金ってやつ貰ってます」

「その年金で十分暮らせて行けるでしょ」

「はい少しだけど・・・ギャンブルに使っちゃダメ」

「ありがとうございますナル様」

.....  
「今日はナルと二人きりで食事だな」

「うん郷土料理ってやつ出すわね」

「パンにバターに肉か・・・」

「元々食糧不足だったイニシアにヴィマロから

伝わった食事なんだけど・・・美味しいしなんか

懐かしいんだ・・・」

「ハム・・・なんて固いパンなんだ・・・バターも

水臭いし肉なんてまったく味がしない」

「ミラとお食事する時何をもてなそうって考えた時

イニシアが一番困ってた時にヴィマロから与えて貰った食事って

思ったの、ヴィマロの食糧事情も大変だったって聞いている」

～物乞いなど蹴飛ばしてしまえ！～

「なんて・・・なんて固いパンなんだ・・・うう」

～こんな腐ったリンゴ食べられるか！～

「なんて水臭いバターなんだ・・・ううう」

～黒人ってだけでなんでこんな目に・・・～

「なんて・・・なんて固い肉なんだあ！うううう」

うああうううあああ

ミラは固いパンを無理やり口に入れながら泣きじゃくりました

机を叩き咳き込みながらパンを水で流しこみ

ミラは激しくそれはとても激しく自らを追い詰めました

純粋なナルと出会い今まで信じて来た何かが崩れ去り

光を見た瞬間でした

「ミラ・・・大丈夫？」

ミラは何かを決意したかのようです

「うん！大丈夫！」

「ヴィマロに行った時思ったの

なんて強大な国家なんだろうって

もの凄い人たちの努力の結晶なんだろうなって

その人たちは君主の事きっと慕っているって

そうでなきゃ行けないって思ったの」

「ああ君主たる者そうでなくてはならないな・・・」

光を見たミラ、ナルが伝えたかった想いが届いたかどうか

何か・・・大切な何かに気付いたミラだった

そしてこの事がきっかけでヴィマロ帝国の闇に光が差し込む事になる



## 第5章～革新～

---

第196回帝国議会15日目

「私は黒人差別撤廃法・スラム改善関連法案を提示させて頂く」

「真ですか？ミラ様」

「ああ」

「ミラ様はイニシアで何があったんだ？」

Blackpeople第一強制就労所

「おい今日はミラ様が来るらしいぞ」

「黒人の者達よ・・・今まですまなかった・・・」

ミラは涙を浮かべながら

「君たちは今日を持って解放される」

うわあ～

「でっで俺たちどうなるんだ？」

「社会に適応出来る様に訓練を受けて貰う」

「今日で君たちは卒業だ。進学する者、就職する者  
どちらにせよ差別はされないが偏見は受ける  
絶対に負けないように」

お前どうする？

俺大学に行く今日から一人暮らしだ

「あれ？鍵がねえよ・・・最悪だようう・・・うわあ～」

「どうした？」

「あっお巡りさん！家の鍵がねえよ」

「荷物拝見させて貰う・・・これがカードキーだ」

「これかあ～ありがとうございます」

「黒人よこれから大変だと思うが気を落とさずに」

「電気のスイッチはこれか！」

パチ

「すげ～テレビがあるステレオコンポもエアコンも！！！」

とりあえずテレビ付けてエアコン付けてうわ～」

ボブははしゃいでいます、

そしてボブがヴィマロの黒人に対する偏見を打破していく事になります

ボブはヴィマロ最高学府の帝国大学へ入学しました  
周囲の偏見に対して泣き言を言わず  
必死に勉学に励むボブ  
そんな一生懸命なボブを遠くから見つめる女性が居ました  
彼女の名はアン、白人の女性でした

「ねえ本当に彼なの？アンが好きになった人って」

「冗談でしょ？黒人だよ？」

「どこ好きになったの？」

「真面目で一生懸命な所よ」

「でもお前白人だぞ？良いのか黒人の俺と付き合っても」

「うん♪」

「明日お弁当作って持って来るからベンチで待っていて」

「ああ楽しみにしてる」

「私ってバカ・・・明日日曜ジャン・・・」

「一応来てみたけどやっぱりいない・・・」

「お～いごめんちょっとトイレに行ってた」

「今日は日曜日なのに・・・」

「だって明日だって言ったろ？」

「これ・・・口に合うか分からないけど」

「うわ～美味そうじゃねえか」

ムシャムシャ

「うん！美味しいよ」

「よおボブどうした・・・てかその美しい女性だれだ？」

「俺の彼女だ！紹介するよ、収容所時代の友人マイケルだ」

「初めまして、アンです」

「マジかよ！白人だぜ？」

「ああマジだ！アンは黒人に対する偏見が無いんだ！凄いだろ」

「ねぇママ！スラムが良くなるって本当？」

「うん！ミラ様が改善してくれるって！家まで用意してくれるみたいよ！」

「僕ね、学習机が欲しいな！いっぱい勉強してお医者様になるんだ！」

「楽しみね～ふふ」

「スラムの再開発に関しての事だが・・・財源は皇族や貴族の財産の再配分と言う形で行うことにした」

「今日はスラム街へ行く事にした」

ミラが演説に立つようです

「聞け皆の者、このスラム街を再開発する事にした  
皆には新しい住居や店舗を用意する、まず施しから行う  
今まですまなかった・・・」

「わ～ミラ様万歳！！」

バァ～ン

「陛下！」

突然の銃声であたりは騒然とした

「ミラ陛下の容態は？」

「意識不明の重体です・・・それよりこんな物が」

「これは！！！」

ヴィマロ内務省

「これはミラ陛下がスラム街で銃撃されたとき落ちていた物だ」

「諜報部の見解ではイニシアの公安のバッジらしい」

「ではイニシアの犯行と断定してよろしいので？」

「イニシアに確認を取った所断じて違うとの見解だったが・・・」

「バッジのIDは確かにイニシア公安の物である事が分かった」

イニシア

「ミラの容態は？」

「以前意識不明です・・・」

「それよりヴィマロが不穏な動きを見せています」

「国境付近にヴィマロ帝国軍部隊展開中」

「ヴィマロが宣戦布告するのも時間の問題かと・・・」

「犯行現場に落ちていたバッジは我国の公安調査庁の物と判明」

「IDのプロフィールは書き換えられていて・・・」

イニシア皇宮警護隊

「ヤン・・・」

「ん？なんだケイ」

「なんか怖い・・・うふ」

「気持ち悪いなあ～男のくせにそんな弱音吐くなよ」

「セシル様どうされます？」

「先ほどヴィマロの内務省と手を結び今回のミラ様銃撃事件の真相を追う事になった」

果たしてヴィマロとイニシアの運命は？テロ組織ラ・リーベルテの狙いとは

続きはまた今度

## 第6章～古代の恩恵～

---

容態が安定したミラ

「ミラ様ナル様より電話が」

「ナル・・・」

「ミラ！大丈夫！」

「あのバッジ偽者だったらしいな」

「うん！Dはイニシアの一般人の！Dでその人今回の事件に無関係」

「ミラに見せたいものがあるんだけど体治ったらイニシアに来て」

イニシア 皇居地下空間にて

「なんて広大な地下空間なんだ！」

「いつごろ作られたのかは分からない

でもきっとここにクリスタルの謎が記された書が

コホン」

「大丈夫ですかナル様」

「ん・・・ちょっと風邪ひいたみたい、平気よ」

「皆手分けして探してみて」

「この部屋が怪しそうだ・・・ん？」

そこには数字ロックが掛けられたドアが

「開いてる、よし」

ヤンは本をつがいにしてドアの中へ

「ヤン？ヤ～ン」

続いてケイもやって来た

「んドアが開いてる」

つがいの本につまづきドアが閉まった

数字もオートになん重にもかかってしまった

「ガタン」

「なんだとお～」

「ヤンそこに居るのか？」

「ケイ！なんてことしてくれたんだ！開かない」

30分後

「皆を呼びに行ってくる・・・その前に」

「何だ？」

「もう一生ヤンがここから出られないかも知れないから言っておきたい事があるんだけど」

「何？」

「実は・・・僕ヤンの事が好きなんだあ～って言っちゃったあ～」

「ああ俺もだケイ」

「そうじゃなく男として僕ゲイなんだ！ケイがゲイなんちってうふ」

「なんだってえ～」

「早く出てきてね！」

「出たくないよお～うう」

1 時間後

「ダメだ開かない」

「建国記念日、終戦記念日、親皇誕生日何入れても反応しない」

「ミラ分かる？」

「ではこのイファマールの歴史書ににかかれてる最初の日付イファマール暦0000年を入れてみたらどうだ？」

「0000」ありきたりだよそれ」

全ての歴史の始まり神が生まれ世界に人類が誕生した日

(0000・・・ガチャ)

「開いた！ヤン！ヤ～ン」

「来るんじゃねえよ うう」

「これです」

「ラ・リーベルテ・・・イスカリオテ帝国の学生運動時代の組織だ」

続く

## 第7章～生と死～

---

「ナル・・・」

ミラはナルが遺したDVDをチェックしました

「ミラ・・・コホコホン、この映像見てるって事は  
私はもう天国へ旅立ったのですね」

「ミラと出会ってから・・・」

「ううナル・・・」

「ここで1枚目は終了です！では2枚目に替えてください」

「このDVDではナルといつでもお話が出来るよ！」

「何を言ってるんだ？」

「ではミラ今日の体調はどう？」

「ん？まあまあだ」

「うんうんまあまあだ（笑）」

「なに！？」

「ではミラ今一番の悩みは何？私の事意外で」

「ん～娘の事かな？私に似て勝気な所は良いのだが  
少しでもナルの優しさって物を学ばせたい」

「うんうんやっぱ娘さんの事かな？勝気なものも立派な個性  
だけど私みたいな優しさかぁ～何か照れる（笑）」

「なんなんだ？映像は確かに過去に撮影された物  
でもリアルにナルと会話してるみたいだ」

「コホコホン ではミラ今一番欲しい物は？ナル以外で」

「お金かな？現在世界情勢は逼迫していて軍事費が思った以上にかかる」

「うんうんやっぱお金でしょ？おおよそ軍事費！ヴィマロは世界の警察の手前  
各地の紛争に介入し世界平和を目指さないといけないからね」

「うん！そうなんだもう終末論を信じる学生など対処に困っている」

「ではミラが今一番・・・タイムマシンがあれば行ってみたいのは？」

「未来だな！未来で何が起こるか予測して今に帰り対処する」

「過去だよね・・・もう一度あの頃に帰りたいね・・・楽しかったね  
ここまで来ると違ってるかな？」

「大丈夫だナル！おいDVDをさっきの所まで戻せ」

「ではミラが今一番・・・タイムマシンがあれば行ってみたいのは？」

「過去だナル・・・ナルと出会って楽しかった日々あの頃に帰りたいのは  
私も同じだ」

ミラはナルとの会話を楽しみました

時に違った事言って見たりして

でももうナルはこの世には居ません

この混沌とした世界情勢に立ち向かうためミラは決心します

「今日はお酒はよろしいので？」

「ダンお前結婚するつもりは無いか？」

「えっはっ機会があればぜひ」

「皇女カノン嬢が婿を探している」

「なんですと！」

「ダンにはこれからも私の身辺を手伝って欲しい」

「はっこの身が滅ぶまで殿下におつかえします」

「でだ、カノン皇女にこのヴィマロへ嫁いで貰うことにする」

.....

ダン自室にて部下との会話

「ヒラルルの皇女カノンと言えばイファマールで1、2を争う美女」

「これは平民出のこの俺にチャンスが来たってもんだ」

「でも何か裏がありそうな・・・」

「まあ政略結婚である事は間違いない、この世界情勢だ」

「殿下は本気らしい」

「では遂に？」

「このまま各地の紛争に労と金と時を費やすのならいっその事裏で手を引いている

イスカリオテに宣戦布告だろうな」

「本当にイスカリオテが？」

「世界を混沌にしたかった目的は果たせただろうが目論みは外れ

殿下とナル様の絆やイニシアと我国の密な連携で第3次イファマール大戦は起きなかった」

「ただ一つ・・・」

「ナチナオール帝国がこちらの臨時同盟か不戦を貫いてくれたらイスカリオテなど  
恐れるに足らん」

.....

お見合いの日

「もう少しで皇女は来られます」「ハイ」  
なんて美しいんだ  
「初めましてヒラールのカノンと申します」

数日後

「どうだ見合いのほうは上手く行ったか？」  
「はまた後日お会いする予定で」  
「女には気をつけろダン」  
「へっ？」

そして結婚へ

「今日は新婚初夜ですねダン様」  
「ああ」  
「この者たちは」  
「私の直属の部下で・・・」  
「秘密は守ってくださる？」  
「もちろんです！夫婦生活は決して外には」  
「ああそう」

机の上に足を乗せたカノン

「たったばこ？」  
「はあ～かったりいなあ～おいダン！酒飲むぞ！酒！」  
(最悪だこの女！猫かぶってやがった！)  
「どうせ政略婚だこんなもの」  
「こっちへ来い！」  
「なんだその口の利き方」  
「見せてやる」

ダンは自らの事務室へカノンを招き入れた

そこには数名の部下たちが巨大スクリーンを前に作業していた

「これ世界地図・・・何？この赤い点」

「世界で起こっている紛争の地域さ」

「諸宗教過激派から左翼ゲリラまで、今ヴィマロが相手にしている  
世界をこの混沌から救い世界平和を成し遂げるその片腕として  
俺はミラ様にお仕えしてる」

「・・・」

「カノン殿が普段男勝りで酒・たばこも吸う事も許す」

「・・・」

「私は貴方を命をかけてお守りします」

「・・・酒飲むぞ・・・ダン・・・」

「ハイ」

## 第8章～イスカリオテ戦役～

---

### イスカリオテ戦役

#### 戦場にて

「撤収だあ～」

「こちらアルファチーム現在イスカリオテ首都に置いて  
首都防衛隊と交戦中、空軍の応援を要請する  
現在首都攻防戦に置いて我軍が劣勢である」

「いいから俺を置いて逃げろ」

「何言ってるんすか、仲間を置いて逃げる訳行けないでしょ」

「仲間・・・か・・・」

#### 数年前

「今日から配属になったケンです」

「お前がゲンか？」

「ケンです」

「どっちでも良い可愛いがってやる」

「おいゲン、パン買って来い」

「俺はホットドック、お金はお前が支払えよ」

・・・「ケン・・・すまねえ」

「今初めてケンって呼んでくれましたね！嬉しいっす」

「こちらアルファチーム・・・物凄い数のモバイルノーツです  
至急応援願います・・・うわあ～ ジー」

「どうしたアルファチーム！応答せよ！」

「こちらアルファチーム我方のモバイルノーツ隊全滅、機動歩兵隊にて  
交戦中撤退の許可を要請する」

「アルファチーム撤退は許可出来ない」

「・・・了解、応援はまだか」

「現在首都に対しイニシアから新型モバイルノーツ部隊がもう少しで到着  
それまでのいでくれ」

「了解」

首都攻撃隊第三前線基地

「帰ってきたぞ～」

「ジャンの野郎生きてやがったぜ」

「ケンも一緒だぞ」

「もう大丈夫だケン」

~~~~~

ネオ・・・ネオ・・・世界を混沌から救うのです

誰だ！

私は・・・イ・ファ・マー・ル

~~~~~

ここでこのイファマー追憶記Liteは一旦お休みです

今後スピンオフ作品として一冊の本として完全版を公開する予定

どうぞお楽しみに

## 日本人の嫌いなブラックジョーク

---

日本人はブラックジョークが苦手？  
自作ブラックジョークを集めました

# 世界は一つになろう

---

「フランス新聞社やスーパー立てこもり事件で  
世界50カ国の首脳が腕を組んで歩いたり  
フランス全土で世界中から370万人々集まってデモ行進だって」

テロリスト「俺たちが世界を一つにしてやった！」

## 神との戯れ

---

フランス人記者

「テロリストに取材したいと思います」

テロリスト

「神は偉大なり」

ポルトガル人翻訳家

「神を信仰してる我々は尊大って言ってます」

テロリスト

「神と共に戦ってる」

ポルトガル人翻訳家

「神と共に泥んこ遊びしてる」

フランス人記者

「ああだから彼らは神の顔に泥塗ってるんだね」

# 聖戦

---

テロリストボス

「聖戦をするにあたり神の敵を作らねばならない  
どうすれば良い」

テロリスト幹部

「外国を敵にしたければその国でテロを起すか  
その国の国民を人質にして殺せば良い」

テロリスト下っ端

「俺たちは聖戦より自分の居場所を見つけないだけで」

## 偶像崇拜

---

イスラムテロリスト

「偶像崇拜は断固拒否」

風刺家

「音楽も立派な偶像です」

## 偶像崇拜Part2

---

テロリストボス

「ありとあらゆる偶像は破壊しろ」

テロリスト幹部

「音楽も偶像らしい・・・うう」

テロリスト下っ端

「では本も・・・コーランも偶像だ！！焼き払いましょう」

## 啓蒙犯罪をご覧になられた方へ

---

おわりに

いかがでしたでしょうか？

現時点でのBESTな夜美神威の作品を発表出来た事は大変な喜びです  
満足された方もまだまだ物足りないって感じた方もいらっしゃると思います  
不安と期待を抱きつつ執筆してきました

私の作品は短いです

端的に表すならプチショートショートが良い例かと

また文章能力も低いので幼稚な作品に見られるかも知れません

しかし大人はもちろん子供まで楽しめる楽しい作品集になったと自負しております

どんな時にどの様に作品が生まれるのか

普段何気に過ごしていると見過ごしてしまう事柄から生まれてきます

それをチルドレン達が受け取って後はインスピレーションに身を任せ生み出しています

では次回作も良い意味で期待を裏切りたいと思います

ぜひ手にとってやって下さい

これからも夜美神威を宜しくお願いします

b y G A N E R F 夜美神威

## 啓蒙犯罪

<http://p.booklog.jp/book/90888>

発行日：2014年12月10日

原案・企画:GANERF

著者：夜美神威

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yaminoshizuku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90888>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90888>

©kamui Yami 2014 printed in japan

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ